

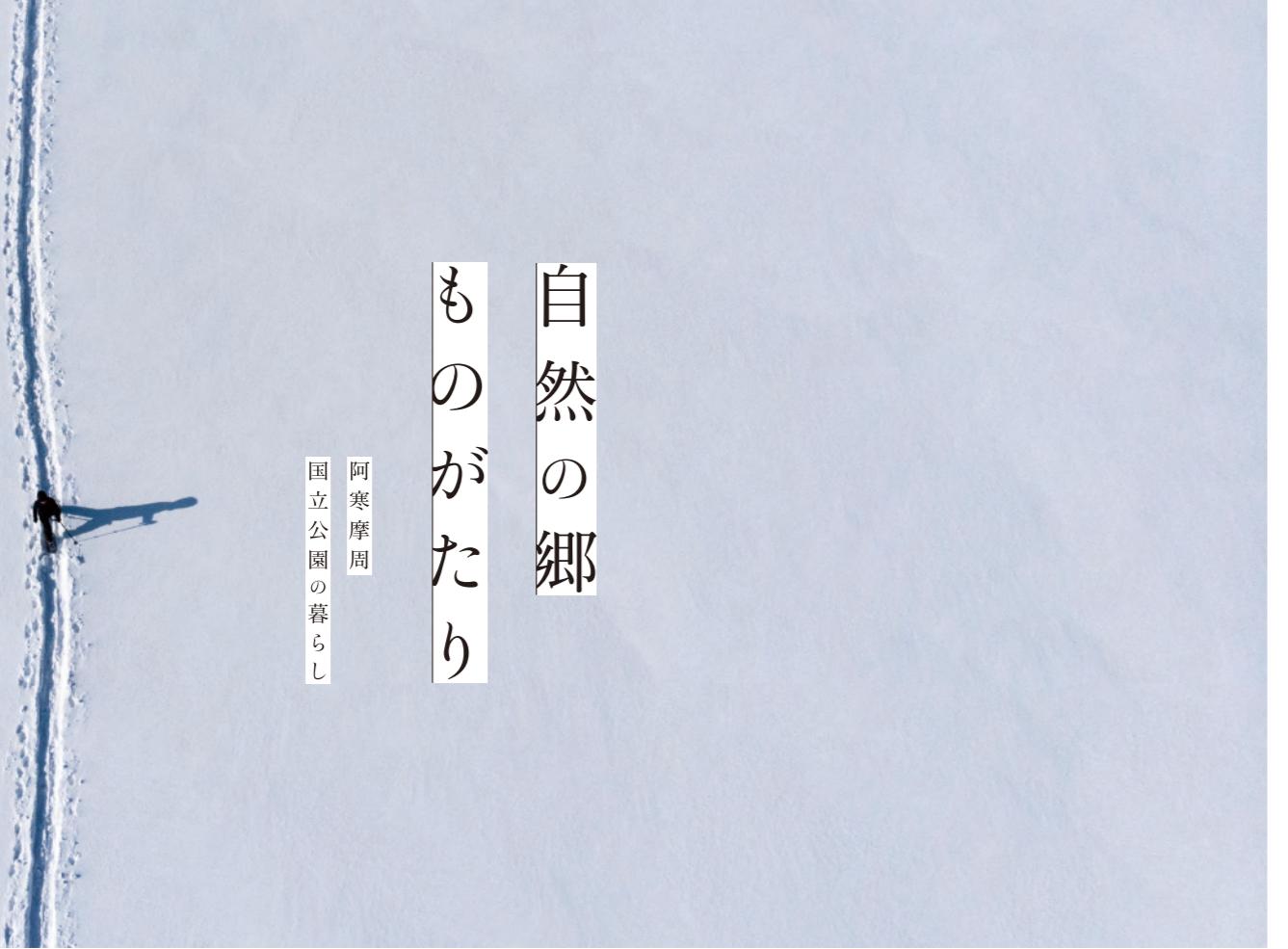
自然の郷
ものがたり

国立公園の暮らし
阿寒摩周



自然 の郷 ものがたり

阿寒摩周
国立公園の暮らし



阿寒摩周国立公園で受け継ぎたい暮らし

目次

- 04 [座談会] 阿寒摩周国立公園で考える持続可能な観光と環境
- 12 [聞き書き] 松岡尚幸さん
守りたいものは、自分たちで守る。
未来を他人任せにしないまちづくり
- 18 [聞き書き] まりも俱楽部
人と人を繋ぎ、地域をつくる。
井戸端会議から始まるまちづくり
- 22 [聞き書き] 瀧口健吾さん
自然と共生する阿寒湖アイスコタン。
伝統を楽しむ、アイヌの案内人
- 26 [聞き書き] Café de Camino
「足寄なんて……」を乗り越えて
地元の人にこそ知ってもらいたい地域の魅力
- 32 [座談会] 変わりゆく川湯の、変わらない景色。
私たちが未来に引き継ぎたい「地元」の姿
- 36 [聞き書き] 信太真人さん
暮らしまで自然も、守り続けるために。
ロングトレイルで、地域の進む道を拓く
- 40 [聞き書き] 磯里博巳さん
自然のなかにあるストーリーを大事にしたい。
屈斜路湖に望む「静かな観光」
- 44 [聞き書き] 中嶋康雄さん
始まりは、一枚の絵だった。
「森の中にある温泉街」ができるまで
- 50 [イベントレポート] 地域と環境省が手を携えるまちづくり。
阿寒摩周国立公園が目指す未来
- 摩周・屈斜路

国立公園の中に、暮らしがある。意外に思われるかもしれないが、世界を見渡してみると、これは日本の国立公園における特徴のひとつです。例えばアメリカでは、国立公園内の土地を所有・管理しているのは国で、國から許可を受けた事業者しか開発できません。一方の日本では、國の土地だけでなく、暮らしが続いてきたエリアも含めて国立公園に指定されています。このため、自然環境を保護しながらも、生活や観光のために利用することが前提とされているのです。

阿寒摩周国立公園でも、時代の波に翻弄されながら、保護と利用のバランスがずっと模索されてきました。阿寒湖、屈斜路湖、摩周湖という3つのカルデラ湖が隣接した全国的にも貴重な地形と、火山が生み出す温泉で知られるこのエリアは、日本で最も歴史ある国立公園の

ひととして、国内外から観光客を集めています。阿寒摩周国立公園では、阿寒湖温泉やアイヌコタンで知られる阿寒地域に、環境省も伴走しながら、保護と利用のバランスを保つ持続可能な国立公園の姿を、世界に伝えようとしています。

この土地で受け継がれてきた暮らしについて、ひとりひとりの言葉にどうぞ耳を傾けてみてください。幼い頃の記憶、故郷への思い、生活のなかで見つけた宝物。先人たちの思いを受け継いだ物語の先に、地域の未来を描くことができたら——国立公園とともににある暮らしに、新しい輝きが見つかるかもしれません。

阿寒摩周国立公園で考える

持続可能な観光と環境

雌阿寒岳や雄阿寒岳、阿寒湖などがある阿寒地域と、摩周湖や屈斜路湖を有する摩周地域からなる阿寒モク国立公園。2つのエリアは阿寒横断道路で繋がっていますが、それぞれの地域で活動するプレイヤーが地域全体の未来とともに考える機会は、これまであまりありませんでした。そこで本企画では、阿寒地域と摩周地域で働く若い世代の方々が、地域の未来について語り合う座談会を実施。その模様をお届けします。



阿寒モク国立公園で暮らす、それぞれの理由

「みなさん、もともと阿寒モク国立公園のエリアが地元なんですか？」

藤原 僕は神奈川県出身で、大学から北海道に来ました。卒業後に釧路川でカヌーガイド始めた友人に誘われて、弟子屈へ引っ越しましたんですね。最初は腰掛けのつもりだったんですけど、気づけば、こっちに住み始めて22年目になります（笑）。道東というエリアに、まんまと魅了されてしまつて。

とにかく広いんですよ、道東って。だだっ広い。そこが魅力ですね。それに、冬でも晴れの日が多いから、鬱々とした気持ちにならないのもいいです（笑）。

榎本 僕は川湯で生まれ育って、中学からは進学の都合で大阪に住んでいました。大学と就職は東京だつたんですけど、2011年に家業の旅館を引き継ぐために川湯に戻ってきたんです。なので、川湯での暮らしと、外での暮らしがちょうど半々くらいですね。

高橋 私も中学卒業までは阿寒湖に迷ってたんですけど、大学の頃には家業を継ぐつもりでいました。潜在的に「いつかは川湯に戻る」という気持ちがあつたんだと思いません。

松岡 私も中学卒業までは阿寒湖に迷っていました。そこから地元を離れて大学まで進学したんですけど、ちょうど就職活動をしていたときに、JRが北海道のキャンペーンを行なっていたんですよ。そのポスターに阿寒の森の動物が使われていて。それを見た瞬間に、なぜかボロボロと涙が出てきたんです……。

それまでは別に阿寒のことを考



藤原 仁

ふじわら・じん／1972年生まれ、神奈川県出身。アウトドアガイド。大学時代から北海道で暮らし始め、現在までアウトドアガイドとして弟子屈町川湯エリアで暮らす。リバー＆フィールド所属、二足歩行代表。



松岡 篤寛

まつおか・あつひろ／1980年生まれ、釧路市阿寒町阿寒湖畔出身。阿寒観光ハイヤー代表。高校から阿寒湖を離れるが、2003年にUターンして家業のタクシー会社で働き始める。2005年から阿寒観光ハイヤー代表、くしろロコサイクルプロジェクト代表。



榎本 竜太郎

えのもと・りゅうたろう／1980年生まれ、弟子屈町川湯出身。「お宿 欣喜湯」4代目。中学生から本州で暮らし、旅行代理店勤務を経て、2011年から家業のホテルで働き始める。2017年から株式会社川湯ホテルラザ代表。



安井 岳

やすい・がく／1980年生まれ、帯広市出身。ネイチャーガイド。2001年に阿寒湖に移り住み、阿寒ネイチャーセンターにて自然ガイド・カヌーガイドを務める。



えたりしてなかったんですけど、心の奥にはやっぱり故郷に帰りたいという気持ちがあったんですね。それで、2003年に戻ってきて、父が経営しているタクシー会社に勤めることになりました。だから、あのときにJRが北海道キヤンペーンをやっていたのかつたら、全然違う人生を歩んでいたかもしれません（笑）。

安井 僕は帯広出身で、父が日本山脈の登山ガイドをやっていたので、ずっと山奥で育ちました。阿寒に来たのは2001年からで、こっちで父が立ち上げた会社を手伝うようになって、そこからガイドとして活動しています。こういう静かな雰囲気が好きだったし、同世代の人も多かったので、そういう出会いのおかげで20年近く居続けられているなと感じています。

阿寒モクには小さなガイド会社が多いんですよ。というのも、道南や道央に比べるとお客様が少ないですし、オフシーズンが長いので、会社を大きくして、たくさん人を雇うことが難しいんです。だから、みんな夏場はカヌー、冬場はスキーみたいな感じで、いろんなガイドをしていますし、必

要に応じてお互いをヘルプしながら仕事をしています。

持続可能な環境と観光のバランス

「阿寒モク国立公園へ来るお客様は、どの辺りからいらっしゃる方が多いんですか？」

安井 うちは阿寒を中心に行きをしていますけど、お客様はほとんどが道外の方ですね。

藤原 弟子屈も、道外からのお客様が8割くらいかなあ。

「ガイドをされているお2人から見て、このエリアに遊びに来る方々が求めているものは何だと感じますか？」

藤原 やっぱり、人の少なさじゃないですかね。このエリアの特徴っていうと、そこかな。北海道が好きな人って、どんどん東に向かっていくんですね。人里を離れ、ワイルドな環境を目指して。

道東は、北海道の中でも自然が近い距離にあるし、異国感がありますよね。

安井 僕も、人が少ないっていうのが、このエリアの一番の魅力だと思いますね。そういう感覚が、僕らガイドと、このエリアに遊び



度で、宿泊のキャパが50000人くらいあるので、時分ぐらいあるのかな。なので、時期によっては60000人くらいこの町に滞在しているんですよ。その人たちが使った排水を処理するということは、少なからず環境に負荷をかけているわけじやないです。そう考えると、これからは「もっと観光客を増やしましょ！」という時代ではないのかな、と思いますね。

時 い い す 人 流 境 上 な よ う い て か す ト が い い ま す 。

安井 そこからまず下水処理場ができて、観光客の方も減って、今は阿寒湖も周囲の森もだいぶ綺麗になつてきています。

そういうことを考えると、もし今の水準でもこのエリアの人たちが暮らしていくなら、観光と環境のバランスを保ちながら生活していくたほうがいいんじゃないかなと思いますよね。それが、持続可能な地域のあり方なんじゃないかななど。

一観光客の数が減つたことで自然環境が良くなつたという一方で、旅館としては観光客が減ると直接的な打撃を受けますよね。その辺りのバランスについて、榎本さんはどのように捉えていますか？

榎本 難しいですよね。私たちを含め川湯の宿泊施設は、温泉という資源を利用して営業しているところがほとんどです。なので、宿泊施設が増えれば増えるほど温泉は枯渇していくんです。

うちも最盛期は源泉まで30メートルくらい掘っていたんですけど、今はお湯の量が地上近くまで減少した影響で、使用される湯量

— 前は使われていたお湯が、余ってきてるってことなんですね。そもそも温泉って、使えば使うほど減っていくものなんですか？

榎本 それは自然のものなので分からんんですよ。例えば、僕がいいんだけれど、中学生くらいのときに釧路沖で大きな地震があつたんですけど、そのときには3日間、川湯の温泉が止まつたと聞いています。そろやつて、いつどうなるか分からかい資源なんですね、温泉つて。

そう考えると、我々にとつて環境と観光のバランスというの是非常に大事で、僕個人としてはJR大路線ではなく、来てくれたお客様の満足度を上げていく方向に進むのが重要だと思っています。

— ガイド業も、タクシーや旅館のお仕事も、結局は環境と観光のバランスが重要ということでしたか？

榎本 うーん、川湯では定例的にやっている会議もありますけど持続可能性のある観光地を目指すというような題目ではないですね。

とを話し合う機会はありません。でも、みなさんの話を聞いていて、阿寒も川湯も同じようなことを考えてるんだなと思いましたね。



度で、宿泊のキヤパが5000人、分ぐらいあるのかな。なので、時期によっては6000人くらいが、この町に滞在しているんでよ。その人たちが使った排水をすと、そういうことは、少なからず環境に負荷をかけているわけじゃなですか。そう考えると、これからは「もつと観光客を増やしましょ！」という時代ではないのかう！」と思いませんね。

安井 みんなが地域のキヤパを手く認識できればいいですけどそこはやはり商売との兼ね合い、なるので難しいですね。いつもお客様さんが来れば儲かるけどそれだけを追い求めていいのかことは、ちゃんと考えなきゃいけない部分だと思います。

阿寒湖温泉は、最盛期で年間100万人以上のお客さんが来ました。だけど、それは明らかにオーバーユースだったんですけど、今は半分近くまで減ってますね。今は半分近くまで減ってますが、自然環境はどんどん回復しているんです。

松岡 昔って、阿寒にも大型観光バスがガンガン来てたんですね。でも、そういう旅行客の人たちで、別に阿寒湖じゃなくとも、かつたんだと思うんです。温泉があつて、おいしいご飯が食べらるれば。

安井 そういう時代を経て、観光がかかりますけど、コロナの影響でいろいろなことがストップし、今つていうのは、ポジティブにこれを真剣に考えるタイミングに来れば良い機会ですよね。

アウトドアツアーハーへの参加者は、明らかに団体客から個人旅者へとシフトしています。「どちらいいから温泉とおいしいご飯があるところ」ではなく、明確に阿寒の雰囲気を好んで来てくれる方も多くなってるんですよ。そういう意味でも、今のような盆地で落ち着いた雰囲気を、僕らが守つていかなきやなと思っています。

A photograph showing a group of people from behind as they walk along a dirt path through a forest. Some individuals are wearing backpacks and carrying cameras, suggesting a field trip or survey. The ground is covered with fallen leaves.

とを話し合う機会はありません。でも、みなさんの話を聞いていて、阿寒も川湯も同じようなことを考えてるんだなと思いましたね。

A photograph of two men sitting at a table in an indoor setting. The man on the left is wearing a light-colored button-down shirt and has his hands clasped. The man on the right is wearing a dark grey sweater over a turtleneck and glasses, and is gesturing with his hands while speaking.

藤原 横断道路を越えるつて。仕事で行き来することはありますけど、わざわざ話をするためには、お互いになかなかハードルが高いことなので。

安井 そうですね。だけど、ずっと阿寒とか、ずっと川湯だけになると、良くも悪くも落ち着いちや

茶まで行かなきゃいけないんです。それは子どもにとっても、親にとっても負担ではありますね。

だから、豊かな自然のなかでのびのび過ごすのか、やりたいことをやるために地元を離れるかといふ選択が必要な時期は来ると思います。僕自身も、野球がやりたくて中学から地元を離れたので。

松岡 僕の場合、同級生の大半は進学や就職で外に出ていったままで



次世代に残した 地域の宝



きた身としては、やっぱり北海道の自然のスケール感は何物にも代えがたいな思います。

松岡 自分も小さい頃から湖で遊んだり、自転車に乗ったりと、本当に自然が近い環境で生まれ育つたんだなってことに、地元を離れてから気づいたんですよ。「自分が当たり前だと思ってた環境は、どこにでもあるものじゃなかつたんだ」って。

自分の大切な町を
守っていくために

ね。それぞれ生活もあるから、綺麗事ばかりではやつていけないんだけれど。

藤原 僕は、基本的に楽しく暮らしていければいいなと思つてます。だから、仕事ありきではなく、いかに地域の人たちと仲良く、楽しく暮らしていくかを考えています。

「そういえば昔、マウンテンバイクで遊んでたよな」とか思い出してくれたらいなって。そういう阿寒ならではの体験を、若い世代の人たちに残していきたいなという気持ちは、年々強くなっています。

「そういえば昔、マウンテンバイクで遊んでたよな」とか思

で、地元に残っているのは5人くらいしかいません。この辺りって、やっぱり観光関係の仕事をしている家が多いんですけど、そういう仕事って土日はもちろん、夏休みとか冬休みとか、みんなが休みのときに働くじゃないですか。小さい頃は、それが当たり前だと思っていたんですけど、離れてみてから自分は特殊な環境に暮らしていたんだなと気づきました。そういうことを考えると、土日休みの仕事を求めて外に出ていく人たちの気持ちも分かります。

で、僕も子どもの頃は夏休みに親と遊びに出かけた記憶はないですね。遊んであげられませんでした。家族で出かけられるのは、年に数回だけです。

それに、高校進学のタイミングで家を出た子どももいるので、実家から通う子に比べたらお金もかかります。もちろん、都会ではできない経験はたくさんありますね。

藤原 そういう面は確かにありますよね。ただ、こつちに移住してが、地方のほうが子育てにお金がかかるという是有ると思います。

ソテンバイクで走れるアクティビティを始めたんです。しばらくは誰も使ってなくて、私が仕事で嫌なことがあつたときにひとりで走つてただけなんんですけど（笑）。今は利用者も増えてきて、去年はマウンテンバイクの大会もやつたんです。そこで、地元の高校生が優勝したのを見てたら、なんかすごく嬉しくて。

松岡 そうなんですよ。ここに住んでいる中高生の多くは、いつか地元を離れるタイミングが来ると人が集まる場所になつたんですね。

いや展望はありますか？
安井 個人的には、今の状況をどう維持していくかが重要だと思っています。変に欲張りすぎず、反対に水準を下げすぎたりもせず、そのギリギリの境目を維持していくというか。

りといふ変化があるんですよ。そういうのを目の当たりにしていふと、人間だけではなく、この地球に暮らしている動物や植物のことも考えながら、いかにして未来に自然環境を残していくかといふことは意識します。ただ、あくまで楽しくといふ気持ちは忘れずにいたいですね。そうじゃないと、自分自身が詰まってしまうので。一自然のために自分を犠牲にするのではなく、あくまで共存できる道を目指して。

ので、彼らに文しても取扱がかりがないような生き方をしていければいいなと思っています。

ちやいますけど、川湯で働くことや住むことが誇りになつたらいいなと思っていて。そのため、我々が民間事業者としてできることを少しずつ進めていきます。

例えば、スタッフの労働環境や居住環境の改善ですね。そういうことをしていかないと、いい人材は来てくれませんし、すぐにスタッフが辞めてしまうようだと事業としても継続性がないですから。

先ほどお話をしたように、自分たちの子どもも進学のタイミングで一度は町を出ていくと思うんです。でも、その後で「地元に帰りたい」とか「家業を継ぎたい」とか、そう思つてもらえるような町にしていきたいなって。ちょっと漠然としてますけど、そのためには民間事業者としての役割をしっかりとやりたいと思いますし、行政にも働きかけていきたいです。

一川湯について、榎本さんがそこまで強い思いを持って活動されているのは、やはり郷土愛なんですか？

は意地ですれそーちのほうが強いかもしれないです。

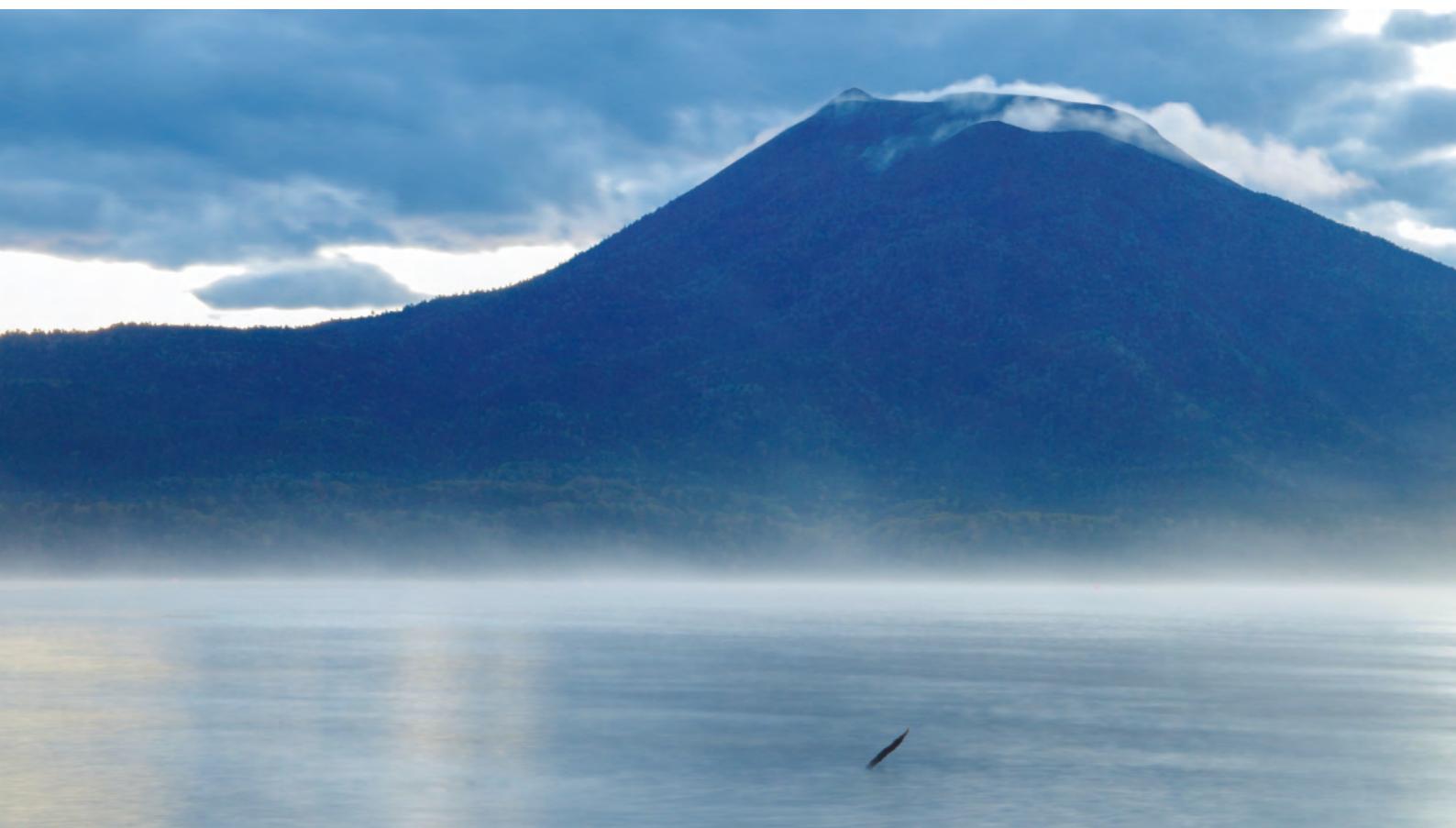
経済規模としては小さくなつてきますけど、川湯は本当に人が良いんです。人との繋がりの強さつていうのは、帰ってきてから10年ですごく感じていますし、みんな応援してくれるんですね。それがプレッシャーになつてることもあるんですけど(笑)。でもやつぱり周りの期待に応えたいという意地があるので、川湯をもつと良くしていきたいです。

山でマウンバイクに乗れたり、地域のお祭りがあつたり、働くときはちゃんと働くっていうメリハリがあるって、すごく良いところなんですね。そういう大切な場所なので、次の世代にできるだけ今の状態のまま引き渡せるようにしたいと思っています。

藤原 2020年に、弟子屈で摩周・屈斜路トレイルっていうのがオープンしたんですよ。その名のとおり、摩周湖、川湯を経由して屈斜路湖までを繋ぐトレイルコースなんですけど、阿寒まで延ばしたいねって話もあって。

松岡 トレイルって、繋がつてなんぼじやないですか。やっぱり隣町でそういう活動をしているのを見ると、繋げたいなと思いますよね。

完成してすぐにたくさん的人が来ないとしても、50年後とか、もうと長い目で見たら、阿寒と弟子屈を繋ぐトレイルコースは地域にとっての宝になると思うんです。もし、我々の世代が恩恵を受けられないですか。だったら、自分たちがやらないで済む意味はありますよね。



ので、彼らに文しても取扱がかりがないような生き方をしていければいいなと思っています。

ちやいますけど、川湯で働くことや住むことが誇りになつたらいいなと思っていて。そのため、我々が民間事業者としてできることを少しずつ進めていきます。

例えば、スタッフの労働環境や居住環境の改善ですね。そういうことをしていかないと、いい人材は来てくれませんし、すぐにスタッフが辞めてしまうようだと事業としても継続性がないですから。

先ほどお話をしたように、自分たちの子どもも進学のタイミングで一度は町を出ていくと思うんです。でも、その後で「地元に帰りたい」とか「家業を継ぎたい」とか、そう思つてもらえるような町にしていきたいなって。ちょっと漠然としてますけど、そのためには民間事業者としての役割をしっかりとやりたいと思いますし、行政にも働きかけていきたいです。

一川湯について、榎本さんがそこまで強い思いを持って活動されているのは、やはり郷土愛なんですか？

は意地ですれそーちのほうが強いかもしれないです。

経済規模としては小さくなつてきますけど、川湯は本当に人が良いんです。人との繋がりの強さつていうのは、帰つてきてから10年ですごく感じていますし、みんな応援してくれるんですね。それがプレッシャーになつてることもあるんですけど(笑)。でもやつぱり周りの期待に応えたいという意地があるので、川湯をもつと良くしていきたいです。

山でマウンバイクに乗れたり、地域のお祭りがあつたり、働くときはちゃんと働くっていうメリハリがあるって、すごく良いところなんですね。そういう大切な場所なので、次の世代にできるだけ今の状態のまま引き渡せるようにしたいと思っています。

藤原 2020年に、弟子屈で摩周・屈斜路トレイルっていうのがオープンしたんですよ。その名のとおり、摩周湖、川湯を経由して屈斜路湖までを繋ぐトレイルコースなんですけど、阿寒まで延ばしたいねって話もあって。

松岡 トレイルって、繋がつてなんぼじやないですか。やっぱり隣町でそういう活動をしているのを見ると、繋げたいなと思いますよね。

完成してすぐにたくさん的人が来ないとしても、50年後とか、もうと長い目で見たら、阿寒と弟子屈を繋ぐトレイルコースは地域にとっての宝になると思うんです。もし、我々の世代が恩恵を受けられないですか。だったら、自分たちがやる意味はありますよね。

A wide-angle photograph of a large, dark mountain peak, likely Mount Agung, silhouetted against a bright, cloudy sky. The mountain's slopes are covered in dense vegetation, and its peak is partially obscured by low-hanging clouds. The sky is filled with various shades of blue and white, suggesting a sunset or sunrise. The overall scene is dramatic and atmospheric.

A wide-angle photograph of a large, dark mountain peak, likely Mount Agung, silhouetted against a bright, cloudy sky. The mountain's slopes are covered in dense vegetation, and its peak is partially obscured by low-hanging clouds. The sky is filled with various shades of blue and white, creating a dramatic contrast with the dark mountain.

阿寒

国立公園に指定される前から、

「切る山ではなく、観る山にすべきである」

という考え方によつて守られてきた、阿寒の自然。

自然とともに生きようとするこの土地の思いを

上の世代から受け取ったひとりひとりが、

愛する故郷を次の世代に託そうとしています。





すくつて飲めるほど綺麗だった
阿寒湖の水

うちは、親父が漁師だったんですよ。阿寒湖漁業組合の組合長を、ずうつとやつてたの。だから、俺も小さい頃からよく船に乗せられてね。自然のなかでいろんな経験をさせてもらつたんだわ。

「自然を守るために、一定の開発は必要」という学び

でいって、ウエアの技術開発や商品提供でスキー選手のサポートをする仕事をしてたわけ。ちょうど景気のいい頃だったからね、選手と一緒に世界中のあちこち行ってさ。

だけど、1980年に開催されたレークプラシッドオリンピックの後に親父が倒れてね。それで、仕事を辞めて阿寒に帰ってきたんですよ。

ひとがいたですよ
廃水処理場ができるからは、水質が改善されてね。5、6年前には、水の透明度が9メートルまで戻ったんです。これは大正時代と同じ状態らしいよ。大正っていつたら、阿寒湖が国立公園に指定される前ですから。その時代のことは知らないけど、少なくとも俺は綺麗だった阿寒の自然が汚れていって、徐々に改善していく様子を見てきたわけさ。

俺自身は阿寒で生まれ育つて、中学で釧路、高校で札幌に出たの。高校からずっとスキーやつてて、大学でもスキー部にいて、そのまま東京でスポーツウェアのメーカーに就職したんですよ。そこで、レーシングサービスつ

それに合わせて阿寒町は7つの計画を立ち上げたんだけど、そのうちのひとつにスキー場の開発プロジェクトってのがあったんですね。そこに町からの委託で、俺も関わることになつたんだわ。長くスキーに携わつてたもんだから。

阿寒湖には昔からスキー場があつたんだけど、俺は人工降雪機をつけようという提案をしたの。なぜかというと、国内のスキー場つてオープンするのが12月とか1月なんですよ。だから、日本人の選手つて夏から秋にはヨーロッパへ練習しに行くわけ。でね、当時スキーのコーチをやつてた先輩から相談を受



「この町の自然は、俺たちが守ると思ってるから」
阿寒観光協会まちづくり推進機構の副理事長を務める松岡尚幸さんは、取材でそう力強く語ってくれました。

阿寒湖の水がコップですくって飲めるほど綺麗だった時代から、バブル景気で多くの観光客が訪れて自然環境が蔑ろにされた時期、そしてコロナ禍という先が見えない状況に立たされている現在まで。

変わりゆく阿寒の姿を間近で見てきた松岡さんに、観光地における自然との向き合い方や、決して他人任せにしないまちづくりの姿勢について伺いました。

まつおか・ひろゆき／1952年生まれ。釧路市阿寒町出身。阿寒湖温泉で半世紀以上の歴史を持つ老舗旅館「東邦館」を経営する傍ら、阿寒観光協会まちづくり推進機構の副理事長や、阿寒湖畔スキー場の所長を務める。過去には市や町の議会議員も務めており、あらゆる角度から阿寒の自然と共存していく暮らしを考え、体現している。



松岡さんがオープンのために尽力した国設阿寒湖畔スキー場「ウタラ」

けたんだわ。「11月だけでも国内で練習できる場所を作りたいんだけど、お前のところはどうだ?」って。

当時、阿寒のスキー場は毎年1月にオープニングしてたの。だけど、試しに阿寒の過去20年くらいの気温を調べてみたわけさ。そうするとね、まあ今でもだいたいそうなんだけど、10月の20日を過ぎると気温がマイナスに入ってくる。で、10月の末になると、マイナス10度まで下がる。ほぼ24時間マイナスって状態になるのが、11月の20日過ぎなんです。だから、11月はちょっと厳しいなと思いつつも、町には人工降雪機の導入を提案したのさ。

それで、まずは阿寒で環境省のレンジャーをやつてた人とか、何人かでカナダのスキー場へ視察に行つたんですよ。ウイスラーとかバンフ、ジャスパーなんかにね。そこでスキー場を経営する人たちに話を聞くっていう海外視察に行つたわけさ。

そのときに一番学んだのはね、「地域の自然を守っていくために、ある一定の開発は必要だ」ってことだつたんですよ。スキー場の開発っていうのは、自然を破壊するわけでしょう。木を切ることなんで。でもね、自然を守るために、そこにどういう価値を見出すかが重要だっていう考え方を学んだのさ。つまり、「自然を守るために、その場所を開放する」ってことなんだけど。

もちろん、そこにはルールが必要ですよ。ルールは作るけど、開放しないと守る価値が見出せないと。何もしなかつたら自然は絶

対に壊されていくんだと。そういうようなことを学んだわけ。

だから、スキー場に人工降雪機をつけて、その価値を高めるつてことを考えたんだけだつたの。そのことを会議で説明したら、あらが言うわけ。「うちの町は、除雪費に5000万も使つてんだぞ。それなのに金をかけて雪を降らすのか?」って(笑)。

人工降雪機の計画は一度頓挫したんだわ。その2年後かな。阿寒の町長選があつて、そこに教育長だった人が立候補したんだ。俺はその人のところへ行って、「スキー場に人工降雪機をつけてくれ」って直談判したのさ。降雪機をつけてくれるなら、あなたを応援するつて。今から考えたら、冷や汗もんだよな(笑)。でも、話をしたら、降雪機をつける価値を理解してくれたんですよ。

だから、俺は応援演説もやりましたよ。それに周りの仲間も協力してくれてね。そしたら、その人が勝ったのさ。それでね、選挙が4月末だつたんだけど、秋には人工降雪機がついて、11月の20日にはスキー場がオープンしたんですよ。例年より2ヶ月も早いオープ

ン。そのときに、俺は思つたね。「いやあ、政治ってのはすげえな」って。

人工降雪機の設置が決まつてから、俺は全国のスキークラブや大学のスキー部を調べて



松岡さんお気に入りの阿寒湖の写真。昔から通っている釣りポイントで、この朝の風景を見られたのは一度きりだという

連絡しまくつたんですよ。その結果、1年目にはミズノのスキー部、NTT北海道のチム、明治大学のスキー部、富山第一高校のスキー部、それと秋田の少年団の5組が来てくれたのさ。まあ、実績がゼロだったから、ほとんど俺の知り合いみたいな感じだつたんだけど。

それでも、道東の冬は天気がいいからさ、練習はすごくやりやすいわけ。ちゃんとスケジュールどおりにいく。そういう環境が評判になつて、次の年には何十倍ものお客様が来てくれたんですよ。

若い世代が暮らしていくなければ、町に未来はない

バブルの時期は、阿寒も景気がよかつたですよ。でも、バブルが弾けてからは本当に苦しかつた。ちょうど宿の建て替えで大きな借

金をしてたし、結婚して、子どもも3人いた

からね。俺の周りもみんなそう。お客さんが減つて、商売が厳しかつた。子どもたちが帰つてこれるような商売をやつてる人なんて、ほんんどいなかつたね。

今でもよく覚えてるけど、札幌の学校に行つてた息子を送つていって、帰りに高速に乗つたんだ。で、運転してたら、ふと気づいたのよ。「あれ、俺金ねえ……」って。そのとき財布の中に1500円くらいしか入つてなくてさ。すぐ次の出口で高速を降りて、下道を走つて阿寒まで帰つてきましたよ。そのときは泣いたね。情けなくて。

それでも、子どもたちが札幌に出てた頃は、一日の最後には必ずガソリンを満タンにしてたよ。何があつても、すぐ札幌に行けるように。そういう経験をしてるから、町の経済もなんとかしたいのさ。子どもたちは、そんな経験させたくないと思うから。

俺は今年で68歳だけね、こう見えていろいろやつてきたんだよ(笑)。市や町の議員も合わせて4期やつたし、マリモ保護会の会長もやつた。冬場にお客さんが減るからつぎ残る道だつてことなんですよ。ここには、どこも真似できない素晴らしい自然があるんだから。

でも、そのためには収入が絶対に必要なんだよ。言い方悪いけど、町が貧乏だつたら、自然は守つていけないですよ。若い世代が生

んだから。





自分たちの町の自然は、 自分たちで守る

ろんな人たちと出会ってるわけね。それを俺は、息子の結婚式で実感したのさ。こんな人たちにお世話になつてたんだなつて。そのときは、涙ながらにお札を言いましたよ。周りの友だちとか、先生とか、会社の人たちにちゃんと育ててもらえたんだなつて。これは本当にね、親としてはありがたいことです。

だから、おふくろと女房が宿の仕事をしてるとも、俺は遊んで歩いてたからよく分かるだ。だから、おふくろと女房が宿の仕事をしてるとも、俺は遊んで歩いてたわけさ。スキーダ、フライフィッシングだっていつってね。そりやつて遊んでるなかで人付き合いが増えよ。6月になつたら釣り宿からくらいいフライフィッシングのお客さんが来るし、12月になつたらスキーのお客さんがいっぱい来るよになつた。それは、親父と一緒に外での遊びをやつたりするのではなく、自然のなかで過ごすことを売りにするべきじゃないかなと思ってる。宿では温泉と食事、それと人的なサービス。そういうものを確立して、しっかりやれる規模ができたら、それで収めるべきじゃないかなつて。そうしていつか、イベントなんかしなくとも、花火なんか上げなくとも、お客様が来てくれる町を目指そうつて、俺としてはそう思つてるんだよね。

そのためには、まず町の人たちが阿寒の自然の豊かさを理解するべきだと思います。1年の中で阿寒の自然がどう動いてるのかつてことを、知らない人が多いんじやないかな。この時期のこういう時間帯には、こういいう現象や動物が見られるつていうような案内

町の人に対して「もつと遊びなよ」つているのは、ちょっとと語弊があるかもしれないけど、家の外に出て遊んでると、いろんなものの価値が見えてくるんだよ。そのためにもね、やっぱり少しずつでも自然の開放に向かっていかなきやなんないのさ。ルールを作りながらも、開放に向けて動いていく。そのなかで、町の人が自然の価値を理解してくれるようになれば、もっといろんなことを楽しめるでしょ。

世の中の意識つていうのは、徐々に変わつていくもんなんですよ。うちのスキー場もね、



昔はロッジでも喫煙可だつたの。でも、俺たちが運営を任されるようになつてからは、ロッジ内は禁煙にしたわけ。そのときはまだね、抵抗がありましたよ。だけど、今は禁煙に対する抵抗つて少なくなつてるでしょ。

だからきっと自然に対する価値観も、人の意識が変わることによつて、少しずつ変化していくと思います。今はまだ自然保護の意識が高まつてるのは一部だから、ルールを作らないきやいけないし、自然を管理する必要もある。でも、やっぱり少しずつでも開放に向かつていかなきやなんないのさ。そうやつて多くの人の価値観が変わつてくると、自然のなかでもつといろんなことを楽しめるようになるから。

俺はさ、この町の自然は、俺たちが守ると思つてるから。環境省の人を前に、こんなことを言うのもアレだけどね（笑）。でも、本当に。環境省に阿寒の自然を守つてもらうといふ感覺はね、絶対に持つちやいけないと思つてる。もちろん、一緒にはやるさ。ただ、環境省にお任せ、国にお任せではダメなのさ。ここは俺たちの町なんだから。そういう意識はね、やっぱり強く持つべきだと思いますよ。



「阿寒湖のことを知りたい」。
好奇心を行動に繋げた瞬間

—まりも俱楽部は20年近く活動を続けている
とのことですが、どのような活動からスター
トしたんですか？

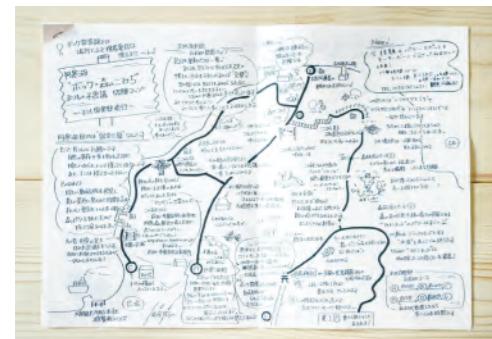
内藤 2001年に準備会ができて、2002
年に正式に活動を始めました。まりも俱楽部
の最初の活動は、「やりたいこと」「必要だと
思うこと」「私たちにできること」をみんな
で書き出すこと。そのときに、一番多かった
のがどんな声だったかというと、「阿寒湖の
ことを知らないから、もっと知りたい」だっ
たんです。じつは阿寒湖に住んでいても、お
昼ご飯をお店に入ったり、阿寒湖の自
然を体験したり、そういう観光をしたことが
ない人がほとんどでした。

平間 私は35年以上前に阿寒湖に引っ越して

小林 そうなんですが、お客様に伝えたいと
いうことを知らないから、もっと知りたい」だっ
たんですね。じつは阿寒湖に住んでいても、お
昼ご飯をお店に入ったり、阿寒湖の自
然を体験したり、そういう観光をしたことが
ない人がほとんどでした。

小林 そうやって最初につくったマップが、
これなんですけど。
—わあ、文字がぎっしり！ まるもの生態を
解説したコラムから、森の散策で出合える動
植物のイラストまで、すごく充実しています
ね。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が
分からなかつたり、どこに行けばいいのか分



まりも俱楽部が観光用に作成している、阿寒湖案内。阿寒湖で出合える動植物やおすすめの写真スポットを紹介するマップのほかに、まりもや阿寒湖の暮らしに関する豆知識を伝えている。この20年間、更新を繰り返してきた

人と人を繋ぎ、「故郷」をつくる。

井戸端会議から始まるまちづくり



阿寒湖には、まちづくりを女性の観点から考える集まりがあります。結成以来、20年近く活動を続けている「まりも俱楽部」です。自分たちが地域のことを学び、地域住民と観光客の両方に阿寒湖の魅力を伝える活動をしています。

今回は、まりも俱楽部が結成された当初から活動してきた4人のメンバーに集まってもらいました。阿寒の外から移り住んできたメンバーも多いなか、まりも俱楽部が地域の魅力を見つけて発信する原動力を聞いてみましょう。

まりもくらぶ／まちづくりを女性の観点から考える有志の集まり。阿寒湖の10年計画がつくられたことをきっかけに、2002年に正式に発足された。60名前後のメンバーが所属している。モットーは「無理をせず、空いている時間に、楽しみながら」。中学校での調理実習で郷土料理を教えていたり、観光客へのおもてなしをしたりして、地域の内外に阿寒湖の魅力を伝えている。取材参加者：部長 小林恵美子（こばやし・えみこ）、副部長 内藤佳子（ないとう・ちかこ）、齊藤昌子（さいとう・あきこ）、平間朋子（ひらま・ともこ）

きたんですけど、当時はもっと観光客が多くなったから、お土産物屋の仕事がとにかく忙しくて。ゆっくり外に出かけられる状態ではなかったんです。

内藤 ですから阿寒湖のことを知るために、みんなさまざまな体験をして、レポートを書き、情報を集めていったんです。観光でいらっしゃったお客様に阿寒湖の何を紹介したいのかを考えながら、私たちが知りたかった情報をマップに落とし込んでいきました。

「行つたことのない飲食店に、どんなメニューがあるか知ろう」とか、「スノーシューを履いて雪の上を歩いてみよう」とか、「全てのホテルの温泉に入りましよう」など、いろんな体験をしましたよ。阿寒湖の魅力を、お客様に紹介できるようになりたかったんですね。

齊藤 私は夫婦ともに本州の出身ですが、移住したきっかけが、観光で阿寒湖に来たことだつたんです。でも当時はまるものイメージしかなかつたから、観光客が何を知りたいのか、気持ちが分かるような気がして。「私たちこういうことを知りたかったな」と思う情報を集めました。

小林 そうやって最初につくったマップが、これなんですけど。

—わあ、文字がぎっしり！ まるもの生態を解説したコラムから、森の散策で出合える動植物のイラストまで、すごく充実していますね。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

いう思いがありすぎて、字がすごく細かいんです。きっと、まりも俱楽部が始まる前からそれが阿寒湖への思いを持つていたけれど、その思いを表現する場所がなかつたんでしょうね。ずっと抱えてきた「知りたい」「伝えたい」という気持ちが、このマップで爆発したんだと思います。ちょっともう、読み切れなくらいに（笑）。

地域に応援団がいるから、まりも俱楽部の活動を続けられる

—マップの作成以外に、まりも俱楽部はどのような活動を進めてきたのでしょうか？

内藤 私は料理が好きなんですけど、阿寒湖の食材のことを知らないで、漁業組合の奥様方からヒメマスご飯のレシピを教えてもらいました。それから地元の食材を使った料理研究会を始めて、商品開発をすることもありました。みんなで仕事の合間に漁業組合のキッチンに行つて、かわるがわる味見をして、また仕事に戻つてね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

小林 おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

からなかつたりして。そんなときに力を貸してくれてくれね（笑）。

小林 私たちが家に帰ると、まりも俱楽部の活動のことを夫や子どもたちに話すでしょ。そこから話が広まって、私たちが動きやださるんです。「力になってやつてくれ」といふように、地域のみなさんが口添えしてくださいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 まだ少し教えてもらいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

内藤 そういう積み重ねのなかで、国立公園のことも少しずつ教えてもらいました。例えれば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

からなかつたりして。そんなときに力を貸してくれてくれね（笑）。

小林 私たちが家に帰ると、まりも俱楽部の活動のことを夫や子どもたちに話すでしょ。そこから話が広まって、私たちが動きやすくなりました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

内藤 まだ少し教えてもらいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

からなかつたりして。そんなときに力を貸してくれてくれね（笑）。

小林 私たちが家に帰ると、まりも俱楽部の活動のことを夫や子どもたちに話すでしょ。そこから話が広まって、私たちが動きやすくなりました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

内藤 まだ少し教えてもらいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

からなかつたりして。そんなときに力を貸してくれてくれね（笑）。

小林 私たちが家に帰ると、まりも俱楽部の活動のことを夫や子どもたちに話すでしょ。そこから話が広まって、私たちが動きやすになりました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

内藤 まだ少し教えてもらいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

からなかつたりして。そんなときに力を貸してくれてくれね（笑）。

小林 私たちが家に帰ると、まりも俱楽部の活動のことを夫や子どもたちに話すでしょ。そこから話が広まって、私たちが動きやすになりました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

内藤 まだ少し教えてもらいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

からなかつたりして。そんなときに力を貸してくれてくれね（笑）。

小林 私たちが家に帰ると、まりも俱楽部の活動のことを夫や子どもたちに話すでしょ。そこから話が広まって、私たちが動きやすになりました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

内藤 まだ少し教えてもらいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

からなかつたりして。そんなときに力を貸してくれてくれね（笑）。

小林 私たちが家に帰ると、まりも俱楽部の活動のことを夫や子どもたちに話すでしょ。そこから話が広まって、私たちが動きやすになりました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

内藤 まだ少し教えてもらいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

からなかつたりして。そんなときに力を貸してくれてくれね（笑）。

小林 私たちが家に帰ると、まりも俱楽部の活動のことを夫や子どもたちに話すでしょ。そこから話が広まって、私たちが動きやすになりました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

内藤 まだ少し教えてもらいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

からなかつたりして。そんなときに力を貸してくれてくれね（笑）。

小林 私たちが家に帰ると、まりも俱楽部の活動のことを夫や子どもたちに話すでしょ。そこから話が広まって、私たちが動きやすになりました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

内藤 まだ少し教えてもらいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私たちは、思いはあるけれどやり方が分からなかつたり、どこに行けばいいのか分

からなかつたりして。そんなときに力を貸してくれてくれね（笑）。

小林 私たちが家に帰ると、まりも俱楽部の活動のことを夫や子どもたちに話すでしょ。そこから話が広まって、私たちが動きやすになりました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

内藤 まだ少し教えてもらいました。例えば、おもてなしの一環で阿寒湖に花を植えようと思つたんですけど、国立公園だから植えられる種類に制限があるんです。そのときは、環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 国立公園のことも、昔はぜんぜん知りませんでしたから。地域のみなさんと一緒に環境省のレンジャーさんが勉強会を開いてくれましたね。

小林 ありがたいことに、何をするにしても地域のみなさんがすごく協力的で、応援団がいてくださるんですよ。漁業組合さんに相談すれば、商品開発をする場所や材料となる魚介を提供していただけたり。マップをつくるための温泉めぐりも、ホテルさんの協力があつてこそできたことです。

内藤 私

の方々の応援と協力がなかつたら、今のような活動はしてこられなかつたと思ひます。

まだ知らない地域の魅力を、自分で発見しに行く喜び

「みんなさんがまりも俱楽部を通じて地域に関わる原動力は、どこにあるんでしょう？」



仕事や勉強のために、海外から阿寒湖に働きに来る人に向けて作成された「阿寒湖1年生」。彼らが阿寒湖のことを知れるように、スタンプラリーやプレゼントを用意した。まりも俱楽部と地域おこし協力隊が連携し、多言語で展開している

齊藤 うちは民芸品店をやっているので、お客様から飲食店の場所や湖の位置をよく聞かれるんですよ。だから「おもてなしをしよう」という気持ちをいつも心に置いています。昔、旅行先で歩いていたら大雨が降つてきることがあって。そのときに、知らない人が私たちを車に乗せて、ホテルまで送つてくれます。だから困つてた人がいたら、私たんですよ。だから困つてた人がいたら、私も声をかけようと思っています。「旅行のときにもうしてもらいたいな」と思うのは、うれしいですね。

齊藤 コロナでみんな歩き始めたよね（笑）。平間 そうそう（笑）。歩きながら自分が気になったものを写真に収めて、後で見返してしまふところがあるんですけど、まりも俱楽部のみんなで協力したら、遠慮なく頼つてもいる鳥を撮っています。

内藤 私も、普段目にしないものを見かけると写真に収めたくなるんですよね。20年住んでいても感動できることがたくさんあるって、すごいことじゃないですか？

平間 每日違うおもしろさを見つけられるから、写真をSNSにアップしたり、友だちに場所を教えたりしています。最近は、きのこの種類が分かるようになりました。

内藤 あとは歩いていると、観光客の方に「何してますですか」と声をかけられることがあります。でも私なら、声をかけてもらつたら嬉しくから。いつでもおもてなしをできるように明したりしています。

内藤 夫にはお節介って言われるし、本当はお客様に必要とされていないかもしれない。でも私なら、声をかけてもらつたら嬉しくから。いつでもおもてなしをできるように心がけています。

小林 自分たちが地域のことを知りたくて、阿寒湖の魅力を伝えなくてたまらないと思つてゐる。これがまりも俱楽部らしさなんじやないかな、と思います。

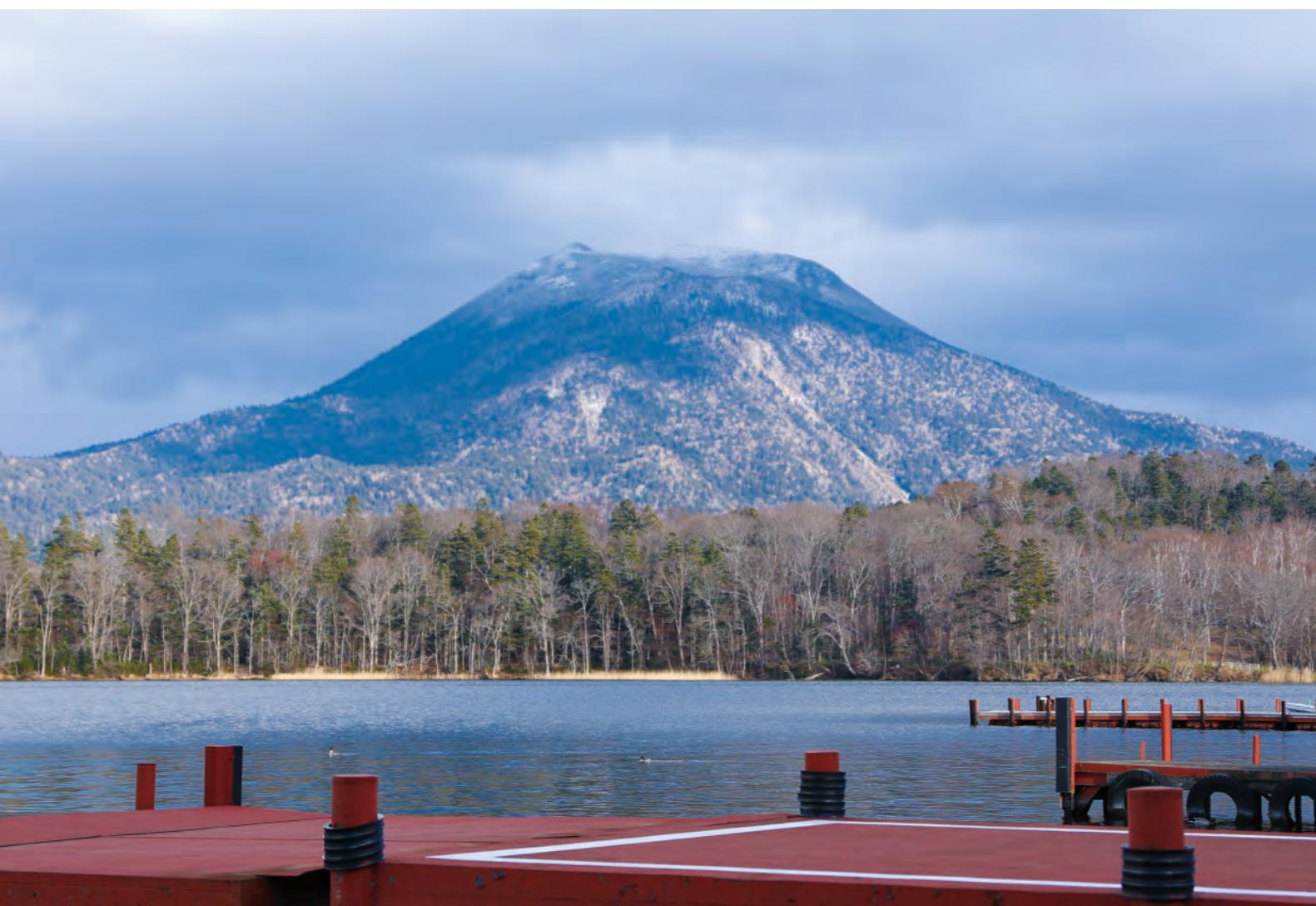
自分たちの暮らしを、自分たちで守るために

「今後よりも俱楽部としてやっていきたいことはありますか？」

内藤 やっぱり、人口が減つていくのは寂しいので、住民を増やしていくたなと思つてます。そのためにも、住民が快適に暮らせるまちづくりを目指したいですね。

齊藤 洗剤もそうだけど、みんな在庫を持っているんですね。友だち同士、気軽に貸し借りするのが当たり前になっています。

内藤 そういう助け合いがあるから、コミュニティができるくんですね。だから新しく入ってきた人に、どうやつたら快適に暮らしてもらえるかなつて悩んでいます。赤ちゃんを預かつてもらいたいとか、ゴミ捨てのことを誰に聞けばいいんだろうとか、大変な思いをしている人もいると思うんですよ。



私も自分ひとりだと「入り込んで良いのかな」「お節介じやないかな」って気が引けてしまうところがあるんですけど、まりも俱楽部のみんなで協力したら、遠慮なく頼つてもらえる関係を築いていけるんじゃないかなと思つてます。

まりも俱楽部には、阿寒湖に外から入ってきて、阿寒湖で子育てを経験したメンバーが多くいます。だからこそ手助けできることも、きっとあると思うんですよ。みんなで暮らしでいるから、助け合つていけるようになったらいいですね。

小林 あとは就職や研修、勉強のために、海外から阿寒湖に来る方たちもいます。その方たちに向けて、「阿寒湖一年生」というマップをつくりました。ホテルで働く海外の方から「住んでいても、阿寒湖のどこで何をしたら良いか分からぬ」と聞いたので、まりも俱楽部が立ち上がる前の私たちと同じだなと思つて、阿寒湖を知れるスタンプラリーにしました。その方たちにとって、阿寒湖が第二の「故郷」になつたらしいなと思いますね。

内藤 他にも、診療所の先生や環境省のレンジャーさん、市役所の方が新しく来るとときは、いつもどうやつておもてなしするかを考えています。大歓迎会をしたこともあるし、少しでも快適に暮らせるように、引っ越してくる方が入る予定の住まいをリリフォームしたりね。そういうことは、意識して動いてるかな。自分たちの生活を、自分たちで守つてきたいなと思います。



天井からつるされた品々。ひとつひとつに記憶された物語が宿り、これからも更新されていく

カムイノミとの出会いと、変化したアイヌへの思い

小さい頃のことで覚えているのは、6歳くらいからこの辺の商店をウロチョロして遊んでいて、「もう健吾、遅いから帰んなさい」と言われるくらい。冬になると雪がガツツリ積るので、そうなるとソリ遊び。夏場は三輪車で、坂の上からガーッと走って怒られたりとか。昔は「うるせーな」と思っていたけど、そういう大人たちがいて良かったかもしれない。わんぱくでしたからね。「20時には寝なさい」と言っていたんですけど、小学生から「夜、店の手伝いをするなら起きていいよ」と言っていたんですけど、小学6年生から「夜、店の手伝いをするなら起き買つていってくれ」って。弾けたのに、大学生が買わないで帰るから、僕がギャン泣きするっていう(笑)。

でも、今だから言えますけど、アイヌのことは嫌いでしたね。幼い頃に、いじめられましたから。アイヌの特徴に、体が毛深いことがあるんですね。だからプールの授業に行ったらバカにされて。親に泣きついて「プールの授業行きたくない」って。あとは、石を投げられたこともありますからね。泣いて帰つて来て「アイヌじゃダメなのか」って思つたこともありました。

その後高校で北海道を離れてオーストラリアへ行って、また戻つて来るんですけど。2010年くらいに姉と一緒に北海道を回つていました。姉とカムイノミを見てからは、木彫りを仕事としてやっていこうと思つたことがあります。

彫り続けていく、伝統と探求

木彫りはね、高校生の頃からちよつとずつやっていました。姉とカムイノミを見てからは、木彫りを仕事としてやっていこうと思つたことがあります。

てみようとなつて。姉がアイヌの勉強をしているところに、ついて行つたんですね。知り合いのアイヌの男性のところに行って、こ

れからお祈りをするぞとなつて、それがとてもかっこよくて。火を囲んでだいたい5人くらいたつたんですけどね。アイヌの方々で一斉にね、一斉に違う言葉のアイヌ語でお祈りするんですよ。それがすごいかっこよく見えますよ。それがすごいかっこよく見え、衝撃でした。涙が出ましたね、あれは。祈りを捧げることやアイヌの言葉が、こんなにかっこいいんだって。

そのときに突然自覚めちゃつたんでしようね。「あ、本当にアイヌ文化ってこんなにかっこいいんだ」って。そのカムイノミを見たときは本当にびっくりして、「僕もやつてみたい」と思つたんで。カムイノミの影響が一番大きいですね、かっこいいと思って。それで祭具のことを調べてみたらおもしろくて。イナウとかさ、イクパスイとか。削りかけがついていると神聖なものなんですね。近くのエカシのおじいちゃんが作つてくれたものもあるけど、恐れ多くて使えないで、飾つています。そうやって、アイヌのことに興味を持つようになりました。



自然と共生する阿寒湖アイヌコタン。

伝統を楽しむ、アイヌの案内人

聞き書き
瀧口健吾さん

自然と共生する阿寒湖アイヌコタン。
伝統を楽しむ、アイヌの案内人

世界から高い評価を受けている阿寒湖アイヌコタンの木彫り作品。「風と光を彫った彫刻家」として知られる瀧口政満を父に持つ瀧口健吾さんは、自身も木彫り作家として、アイヌの精神を受け継いでいます。

亡き父より「イチングの店」を引き継ぎ、伝統を大切にしながらも、アイヌ文化の案内人として新しい取り組みを始めたお話を聞きしました。

たきぐち・けんご／1982年、釧路市阿寒湖アイヌコタン出身。「イチングの店」を経営。木彫り作家・瀧口政満と、アイヌ民族である母の間に生まれる。アボリジニへの興味から、オーストラリアの高校へ留学。帰省後、姉と一緒に参加したカムイノミの儀式に衝撃を受け、アイヌに興味を持つようになる。現在は、阿寒湖でアイヌの伝統を受け継ぎながら、木彫りやガイドを通じて新しい表現を探求している。

いたんですよね。そのときに出会った嫁さんが絵を描いていて、僕が木彫りをやっていたんですけど。父さん、そこへずっと来てくれていましたね。見守ってくれていたのかな。2017年に父さんが亡くなつて、「父さんの店、無くなつちやうからね」って姉に言われて。やっぱり寂しいなつて思つたんで。それで店を継ぎましたね。

木彫りをするときは、ちょっと変わったことをしたくてね。半分は親父が彫つたようにコンコンして、逆側にはアイヌの文様を入れみたりして。伝統を大切にしながら、新しいもの、獨特なものを作つていきたいですね。例えば、鹿の角を使つた、針入れがあるんですよ。アイヌは鉄の文化が無かつたので、日本人との交易で針を手に入れていたんです。その対価つていうのが、熊の毛皮1枚と針が1本。もしくはキツネの毛皮3枚と針が1本。だからどうしても無くしたくないつていうこ



健吾さんの作品。シマフクロウの作品は、半分にアイヌの文様を、もう半分は亡き父の彫り方で彫られている

とで、こういう道具が伝わっています。こうした道具にちょっととした反抗心を加えて、薬莢を使用してみたりしてね。そんなのを作つたり。

木彫りの材料だと、僕はカツラの木が好きですね、彫りやすい。いろいろな種類があるけど、材は試しながらですね。一番重い木は、シマコクタン。真っ黒な種類のコクタンをバ

ターナイフにして、鏡面磨きにして。そういうのは、すぐ売れちゃうんです。他にも、いろいろな材料が好きですね。鹿の角を彫つたり、象牙をもらつて彫つてみたりとか。あと、サメの歯でピアスを作つたりもしています。でもやっぱり木彫りは、ずっと好きですね。まだ嫌いになつていないだけ(笑)。

この天井を見てもらうと分かると思うんですけど、いろいろあるんですけど。僕が使つていたスケート靴がぶら下がつていたり。親父が残してくれたものなんですね。前は2年がかりでアイヌについて、いろんなことを勉強したんですよ。木彫りをしながら「ああ、もう彫れない」となつたらアイヌの本を読んだりして。人前に出るのはあまり好きじゃなかつたんで、べらべらしゃべれるようになつたね。お客さんも、人によつて興味のフックが全然違うから。アイヌの精神性、唄、遊び、言葉とかさ。伝説を知りた人には、エカシから聞いた話をしたりね。

例え、アイヌの精神性とか知りたいって人もあるので、そういう人はガラスボトルの例をよく話しますね。ガラスボトル、それ自体もカムイなんですよ。なぜかというと、人間にはできない「水を保つておく」ことができるから。そしてカムイとアイヌつて対等なんです、常に。もし瓶をこわして、かけられたら、瓶底がありますよね。今はガラスボトルの瓶底がありますよ。他の人が来て「ちょっとこれもらえない?」って言って瓶底を使つたアクセサリーを作ります。そしたら、その人にとつて瓶はまたカムイになる。だから、常に對等なんだよって。ガイドでもそんな話をしていますね。

ガイドはね、僕が楽しもうと思つています。それでお客様からも「勉強になる」とか「おもしろい」とか言つてもらえると、嬉しいです。今はガイド向けに前田一歩園さんの研修があつて、それに参加しているんです。このまま受けいけば、再来年からかな、「森の案内人」って資格がもらえて、普段は入れない「湖北の森」とか「光の森」とか案内で生きるようになります。そうしたらコース設定とかも変えられるんじやないかな。楽しみですね。

受け継がれたものを楽しく、消えないように

ここって、60年以上前から先輩のアイヌがシアターを観光客向けに作つて、伝統的な踊りを見せてきた場所で。ずっと観光とともにあつたので、伝統を大切にしながらも、やつてきたことが先進的なんですよ。今だつた

アイヌの案内人としての健吾さん。ガイド中は冬でも衣装を身にまとい、アイヌの歴史や生活の知恵など詳しく話してくれる。自然と共生したアイヌの暮らし方、考え方を学べる

ら、アイヌ文化とデジタルアートを組み合わせたり。そういう「新しさ」を武器にね、今後も阿寒湖の暮らしをずっと続けていければなど、僕は個人的に思いますね。漫画でアイヌが取り上げられるようになつてからは、ブームのような状態なので。外からお金が入つていろいろなイベントをやるなら、きちんと続けていくように、僕らがアイヌとしての自覚を保たなきやいけないですね。

いろいろ続けていくためには、誰かが動かなきやいけないわけで。自然を守るのも、アイヌの文化を伝えるのも。森でいえば、鹿よけのネットとかありますよね。あれは20年に1回、ネットを換える必要があるんです。網目になつたものを巻いていくんですけど、木が成長するとネットが幹に食い込んでいくんですね。それを外して、またゆつたり巻いてあげて、それを繰り返す。最近も研修で、

小学生と一緒にこの作業をしました。地味に大変なんですね。でも森を守るために、誰かがやらないといけないこと。人の手が1回入ると、自然の森もずっと人が管理しないとならないんです。

アイヌ文化も、世代の移り変わりもあるけど、誰かが伝えていかなきやいけない。でももし僕に子どもができても、子どもが僕と同じように木彫りやガイドをやりたいと言うからは、もちろん分かりません。正直、僕も今は自分の仕事で手一杯で。でも誰かがおじいちゃんおばあちゃんに話を聞いて、次の世代に伝えていかないといけない。そうしないと、受け継がれてきた言葉も物語も、消えていきますからね。

身近な木の話をすると、日本人は「土から木が生える」と言いますよね。でもアイヌは、「木が大地を掘んでいる」と考えます。たとえば山の木を全部切つちやうと、掘んでいた木がなくなることによって、鉄砲水がおきてしまう。環境つて難しくて、そういうところも含めて前田一歩園の土地つて、天然林の保全など、すごく自然のバランスがいいんですね。空気が良いところにしかならない、サルオガセが生えていたりして。アイヌ語で二レクという植物なんですね。そんなことは、これからも楽しんで伝えていきたいですね。僕にとって、木彫りにもガイドにも共通していることは、楽しいことでしょ。長く続けていくためには、それが大事だと思います。





国道241号線沿いにある「Café de Camino (カフェ デ カミーノ)」。足寄町の中心部からオートバイで走行中にあり、北海道内外から人が集まっている



足寄の建設会社が「木組みのカフェ」として手がけた建物には光が差し込んで、気軽に入りやすい雰囲気。壁紙には、足寄の特産品であるラワンブキを混ぜている

町の魅力を伝えるために 公務員から民間事業者へ

佐野 僕は大学を卒業した後に、足寄町の役場に入りました。大学は関東だったんですけど、いつも羽田空港に着くと気分が落ち込んで……逆に帯広空港へ帰ってくるときに、十勝平野が見えるとすごく安心していました。だから、自分が住むのはやっぱり都会じゃないんだなとは思ってました。それで就職先を考えたときに、公務員だつたら十勝に戻れるし、役場職員なら転勤もないからいいなと思う、足寄町役場に就職したんです。

役場には15年勤めていて、半分くらいは観光振興の仕事をしていました。パンフレットをつくったり、観光協会と一緒にイベントを考えるといった業務です。今も続いているオンラインネットのスノーシューアイベントは、観光協会と自分が一緒に企画しました。

そういう仕事は楽しかったんですけど、役場の職員って部署異動があるんですね。そうすると、自分が担当していた業務に関わらなくなるので、イベントや企画を継続・発展させていくことが難しくて。当然、役場職員が事業者にはなれないでの、直接お客様に町を案内したりもできません。そういうことを考えたときに、役場職員という立場でできることの限界を感じるようになつたんです。もつと当事者として、足寄の良さを伝えたいなって。

足寄の良さを伝えるつてことは、役場時代

細矢 私は2019年の4月に、地域おこし協力隊として足寄に来ました。オンラインで新しくできるビジターセンターで、行政と民間の間にいる調整役の仕事をすることになります。もともと私は、人が集まる場所をつくりたいと思っていて。そういう観点でいろんな就職先を考えてたんですけど、ビジターセンターも人が集まる場所のひとつだと

にも仕事としてやってきたつもりなんですが、それって観光地や特産品をPRする業務で、ちょっと違和感があったんですね。足寄以外の地域にも美しい景観はあるし、おいしいものもいっぱいある。そういうなかで、「足寄ならではの魅力って何だろう?」ってことをずっと考えていたんです。それが何なのかは、まだ自分でも見つけられてないんですけど、それを見つけて伝える仕事をしたいと思って、役場を辞めました。

それで、立ち上げたのが「Feet Meet」という会社です。足寄の市街地でカフェ営業をしたり、そこをレンタルスペースとして貸し出したり、それからキャンプ道具の販売・レンタル事業などを行なっています。僕自身が足寄のこととをもっと詳しく知りたいので、地元の方が集まるような場所や機会をつくって、いろいろな魅力を見つけていきたいなと思っています。

地域おこし協力隊を辞め、 人が集まるカフェをつくる

地元の人にこそ知ってもらいたい地域の魅力

「足寄なんて……」を乗り越えて



足寄町には官民という別々の立場を経験した上で、町の未来に向き合っている方がいます。足寄町役場を辞めて会社を立ち上げた佐野健士さんと、地域おこし協力隊からカフェ店長に転身した細矢千佳さんです。

お二人は地元住民が地域の魅力を考える「オンラインの魅力創造委員会」で知り合って意気投合。行政と民間という両方の経験を踏まえ、毎日さまざまな人と接しながら足寄の魅力を探し続けています。

写真右 佐野健士(さの・けんじ)／1978年、北海道幕別町札内生まれ。東京国際大学を卒業後、足寄町役場に就職。15年にわたって、観光・地域振興・財政などの業務を担当してきた。2017年に退職後、合同会社 FeetMeet を設立。コミュニティスペースの運営やイベント企画、アウトドア用品のレンタル事業などを行なっている。

写真左 細矢千佳(ほそや・ちか)／1992年、山形県酒田市出身。帯広畜産大学への進学を機に北海道で暮らし始め、2019年に地域おこし協力隊として足寄に移住。オンラインに新設されるビジャーセンターの立ち上げ準備に携わった。2020年からは、足寄町の「ひだまりファーム」内にオープンした「Café de Camino (カフェ デ カミーノ)」の店長として働いている。

思つたので、地域おこし協力隊に応募しました。

行政と民間の間に立つという仕事をやってみて、行政と手を組んでるからこそできることもあるし、同時に意思決定には民間よ



う少し違うやり方もありそうだな」って思うところもありましたね。だから、「私がやりたいことを、別の方法で実現してみたい」と思い、協力隊を辞めて「Café de Camino（カフェ デ カミーノ）」で働くことになつたんです。

い繋がりをつくっていきたいですね。

会わない人や物と繋がれる場所にしていきた
いなど。このカフェを中心に、どんどん新し
い繋がりをつくっていきたいですね。

はこんな特産品があるんだ」とか「こういう人たちが関わっているお店なんだ」とか、そやつて町のことや物作りをする人のことを伝えられる場所にしていけたらなと思つています。だから飲食だけではなく、カフェに関わりのある方や地元の方が作った物を置いたり、イベントを開催して、普段の生活では出会わない人や物と繋がれる場所にしていきたいなど。このカフェを中心に、どんどん新しい繋がりをつくっていきたいですね。

例えば、この建物は町内の建設屋さんが宮大工の修行で学んできた伝統工法と、北海道の寒さに合わせた建材や設計を組み合わせて建てられています。少し茶色っぽい壁紙は、足寄の特産品であるラワンブキを混ぜた和紙なんです。お店の椅子も、ここで開催されたワークショップに参加してくれた方々が座面を編んで作つたものなんですね。

お客さんが最初にお店にいらつしやるきっかけは「コーヒーを飲みに来ました」だった

佐野 足寄には、たくさんの魅力的な資源があるんですけど、そこに関心が薄い住民の方が多い気がしていて。雌阿寒岳の登山なんかは、外の人にはすごく人気があるので、地元の人で登りに行く方は少ないんですね。

登山って、まずは狭い林道を何十分も車で走って登山口まで行く場合が多いじゃないですか。でも、雌阿寒岳の登山口は、対面通行も余裕でできるような大きい道路のすぐ横にあるんですよね。しかも、駐車場には綺麗な



店内で使われている椅子は、ワークショップで参加者が座面を編んだもの

ので日帰りもできるんです。それに、下りて
きたところには温泉もあるので、帰りにお風
呂にも入っていける。こんなに環境の整った
山って、なかなかないんですよ。

雌阿寒岳へ連れていってもらつたんですけど、景色がすごく綺麗でした。山頂のほうは岩が多くて、なんか地球じゃない場所に立つているような気分になりましたね。山頂からの景色も素晴らしいです。

佐野 住んでいる人が地元の魅力を知るために、外の人の意見に触れることが大事だと思うんですね。外から雌阿寒岳やオンネトーに来ているお客さんはいるんですけど、

細矢 普段の生活のなかで、自分の町についていくので、住んでいる人たちが接点を持つ機会はほとんどありません。それはちょっともつたいない気がするんです。

ちゃんと足寄の自然や食べ物の価値を分かってくれて、それにしつかり対価を払ってくれる人に来てもらうことも大事だなど感じていた。そうじやないと、町の経済が回っていくか

える人が増えるといいなと思ってるんです。そのためにも、やはり登山客をはじめ、外の人の意見を住民の方に知つてもらう機会を増やしたいですね。

町の経済を回していくために

左等

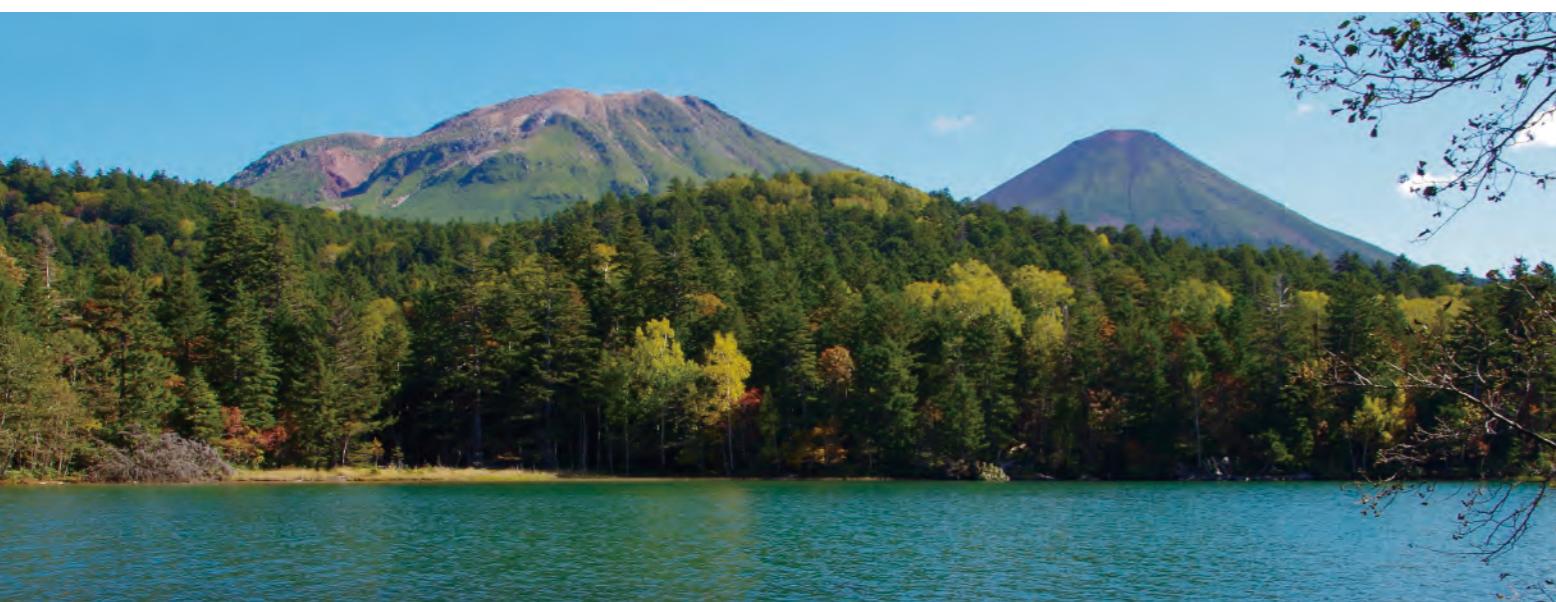
です。でも、いろんな人が集まるカフェやイベントで、今までにない内側と外側の接点が生まれることで、住民の方にも自分たちの町に興味や関心を持つてもらえたらしいなと思っています。せっかく素敵な場所なので。

人の繋がりを増やし、
町の経済を回していくために

佐野 足寄に限った話ではないんですけど、これからきっと人口は減っていくはずです。そこは受け入れなきやいけない部分なんですけど、これから大事になるのは人口の増減よりも、その町で生活してる人がどれだけ満足しているかだと思うんです。だから、足寄で生活していることに満足してる人が増えていくといなつて。今はどうしても「足寄なん

「……」みたいな言い方をする人もいる。自分もこの地域の何がいいのかってことを明確に説明できていません。だけど、僕も含めて「ここがいいから、足寄に住んでる」と言える人が増えるといいなと思ってるんです。そのためにも、やはり登山客をはじめ、外の人の意見を住民の方に知つてもらう機会を増やしたいですね。

ただ、無闇に人を呼ぼうとするのではなく、ちゃんと足寄の自然や食べ物の価値を分かってくれて、それにしつかり対価を払つてくれる人に来てもらうことも大事だなと感じていた。そうじやなへと、町の経済が回つてへか



摩周・屈斜路

カルデラが形づくる摩周湖・屈斜路湖と、

火山の営みが続く硫黄山、そして川湯温泉街。

ここでしか見られない景色で知られてきました

摩周・屈斜路に、新しい風が吹き始めています。

この自然豊かな土地の未来をつくる物語は、

どこへ向かっていくのでしょうか。



私たちが未来に引き継ぎたい 「地元」の姿

変わりゆく川湯の、変わらない景色。

古くから温泉街として愛されてきた川湯には、今でも全国から人が集まっています。最近では、新しいお店がオープンしたり移住者が増えていたり。地域を愛する若い世代の思いが芽吹き始めているようです。

この座談会に集まってくれたのは、弟子屈生まれ、弟子屈育ちの4人。全員が川湯で観光客と関わる仕事をしながら、それぞれのやり方で地域の魅力を伝えています。彼女たちが川湯を愛する理由を聞いてみましょう。

仕事を通じて気づいた、 川湯の魅力

「みんなさんの川湯への思いが深まつたきっかけは何でしたか？」

片瀬 私は就職してからですね。川湯エコミュージアムセンター（エコミュー）でお客さんに案内するために、町の自然や歴史、文化を調べるようになりました。住んでいても知らないことが多くて、地元の方に「昔は肩がぶつか

るくらい道に人が多かった」とみんなに聞けると楽しいんですよ。

「え、肩ぶつかるんだ!?」って。井出 私が小さいときは観光客がたくさん来ていたから、夜は下駄の音が響きわたって眠れなかつた（笑）。

一同 ええ!?

片瀬 こういうエピソードをお客さんが聞けたら、おもしろいじゃないですか。だから町のことを自分なりに吸収して、お客様に「川

湯に来てよかったです」と感じてもらえたらしいですね。せっかくエコミューにいるので、川湯のことをもっと知ろうと思うようになります。あとは、住んでいる私たちからしたら阿寒と川湯は遠いんですけど、お客様から見たら、ひとつ阿寒のことを探してくれる方もいるので、「いや、阿寒湖はちょっと離れてるんで知らないです」

だから阿寒湖や国立公園全体の魅力も、川湯から発信できたらいいですね。まずは自分たちが楽しみながら国立公園のことを知るために、エコミューのみんなで毎週フィールドワークに行っています。

松田 私は着地型観光を手がけている株式会社ツーテンに入つてから、道外のお客さんに「この町、さんと一緒に国立公園の中を歩くもつたないよ」と言われたことがあります。でもエコミューのみなさんと、この地域には魅力がいっぱいあるんだ、と気づくんですよ。

そうやって自分で体験したり、みんなと地域のことを話したりするうちに、お客様に川湯のことをお客さんとの関わりを積み重ね

るくらい道に人が多かった」とみんなに聞けると楽しいんですよ。

「え、肩ぶつかるんだ!?」って。井出 私が小さいときは観光客がたくさん来ていたから、夜は下駄の音が響きわたって眠れなかつた（笑）。

一同 ええ!?

片瀬 こういうエピソードをお客さんが聞けたら、おもしろいじゃないですか。だから町のことを自分なりに吸収して、お客様に「川



榎本 明詞

えのもと・あきし／弟子屈町川湯生まれ。中学卒業後、秋田県の高校に進学。留学を経て川湯に戻り、株式会社ツーテンで勤務していた。現在は川湯で姉と立ち上げた「すずめ食堂&バル」を運営。



松田 亜祐

まつだ・あゆ／弟子屈町生まれ。弟子屈高校を卒業後、歯科医院での勤務を経て、着地型観光を手がける株式会社ツーテンに転職。川湯エコミュージアムセンターのカフェで、商品開発やPRに携わる。



片瀬 亜美

かたせ・あみ／弟子屈町川湯生まれ。弟子屈高校を卒業後、川湯エコミュージアムセンターに就職。自然解説員を務める。センターの維持管理業務のほか、小中学生の総合学習でガイドを担当。



井出 遥

いで・はるか／弟子屈町川湯生まれ。小学校卒業と同時に川湯を出て、母の実家がある群馬県の中学・高校で過ごす。専門学校に進学後、川湯に戻って実家の居酒屋「いなか家 源平」に勤める。



ることで、自分の中に発見があつたんですね。

井出 川湯は、リピーターが多いんですよ。多い人は年に10回来たり、もう30年くらい毎年来ている人もいたり。うちには道外からご飯を食べに来てくれるお客さんもいて、そういう出会いが多いから、ここにいることがおもしろいなと思います。そうやって「楽しむ」と思っていたら、いつの間にかずっとここにいるんですけどね（笑）。

松田 お客様と話したときにふと思つてゐるかを向き合える瞬間があるのは、外から人が来る場所ならではのおもしろさですよね。

人と自然との関わりを未来に受け継ぐための国立公園

ーここで生まれ育ったみなさんにとつて、幼い頃から自然と関わる経験は多かったのでしょうか？

井出 私は、おじいちゃんが自然公園の美化財団に勤めていたので、鳥の映像を見せてもらったり森で木登りしたり。この辺り、ぜんぶ私の庭、みたいな（笑）。そ

うやつて自然と関わりながら、「こ

こは国立公園なんだ」と思つて育ちました。

やっぱり、私たちの親やその上の世代が守つてきてくれたおかげで、残つてゐる記憶や今に受け継がれている場所がすごく多いなと思います。川湯の外に出てみて初めて、子どもの頃は当たり前だと思つていた「普通」の自然は普通じゃないんだな、と気づきました。

榎本 私が覚えているのは、学校の授業で、川湯はカルデラなんだからさんざん言われてきたことだつて…（笑）。

一同（笑）

榎本 でもちゃんと自然を意識するようになつたのは、自分のお店を始めてからじゃないですかね。自然と近ければ、食とも近くなると思うんです。食も、自然の一部だから。

水がおいしいから料理もおいしくなる。空気もおいしい。こうやって「おいしい」に囲まれている暮らしも仕事も、この地域の資源があつて初めて成り立つてゐるんですね。だんだんと「ここに住ませてもらつているんだな」という気持ちを持つようになります。生産者さんや自然と、お客様

中学校では自然科学の時間があるので、私も一緒に自然のなかを歩いています。特に国立公園のこと

は、「豊かな自然を守つていく国立公園」という仕組みがあるんだよ」と意識して話すんです。小学6年生にもなると、「もう言われなくとも分かるよ」と言つてくれんんですけどね（笑）。

井出 子どもを見ていると、授業で町のことを知る機会が多いんだな、と感じます。エコミューに行つて（片瀬）亜美ちゃんに自然について教えてもらうことが、すごく楽しいみたいなんですよ。私の世代よりももっと町のことを知つているんだろうし、好きだと思いますね。

片瀬 嬉しいですねえ。小学校と中学校では自然科学の時間があるので、私も小学生のときに総合学習でここセンターに来て、自然について教えてもらつた記憶があるんですよ。その頃は正直、国立公園について理解できていなかつたと思うんですけど、当時の経験が今に繋がつて。今の子どもたちも、授業で勉強した自然や国立公園のことを、将来どこかで思い出してくれたら理想ですね。

松田 子どもたちを見ていくと、公園のことを、将来どこかで思

えてるんですね。

ー自然のなかを歩いて楽しむだけではなく、この自然が守られている背景として国立公園の仕組みを伝えてるんですね。

片瀬 私も小学生のときに総合学習でここセンターに来て、自然について教えてもらつた記憶があ

るんですよ。その頃は正直、国立公園について理解できていなかつたと思うんですけど、当時の経験が今に繋がつて。今の子どもたちも、授業で勉強した自然や国立公園のことを、将来どこかで思い出してくれたら理想ですね。

松田 子どもたちを見ていくと、公園のことを、将来どこかで思

うんですけど、硫黄山や摩周湖つて、どの世代が見ても魅力を感じ



「帰つてきたい」を いつでも歓迎できる 地域にしたい

ーこれから川湯がどんな場所になつていいとほしいという想いはありますか？

松田 昔みたいに人がブワーッとたくさん来ている状態を、私は目指さなくていいんじゃないかなと思ひます。来てくれる人たちが、ゆっくり静かに休める場所であつたらいいですね。

でも今ままじゃ、空いているシーザンに来たお客様には町が元気ないよう見えちゃうかもしれない。だから川湯が「通りすぎ予定だつたけれど、気になつたとか」居心地良いからまた来たいと思つてもらえる状態になればいいのかなと思います。

井出 弟子屈町は人口減少がすご

るんですね。時代によつて景色は変化しても、共通して感じる魅力がある。自然から受けける感動はずっと変わらなくて、その価値が語り継がれて、次の世代に繋がつていく。自然と人との関わりが受け継がれていくことが国立公園なのかな、と思うようになります。

ー「帰つてきたい」をいつでも歓迎できる地域にしたい

なつていいとほしいという想いはありますか？

松田 昔みたいに人がブワーッとたくさん来ている状態を、私は目標さなくていいんじゃないかなと思ひます。来てくれる人たちが、ゆっくり静かに休める場所であつたらいいですね。

でも今ままじゃ、空いているシーザンに来たお客様には町が元気ないよう見えちゃうかもしれない。だから川湯が「通りすぎ予定だつたけれど、気になつたとか」居心地良いからまた来たいと思つてもらえる状態になればいいのかなと思います。

榎本 海外から来るお客様は「火山が目の前にあつて、国立公園でこんなに自然を楽しめて、温泉で身体を休められて、おいしいものを飲んだり食べたりできるなんてすごい」ってびっくりするんですよ。全部違う場所は、世界を見渡してもあまりないみたいで。そういう場所に興味がある人は国内外にもいると思うので、川湯のことをもつと伝えていきたいです。

榎本 個人的な希望としては、「これがいいな」と思う人に、大事に過ごしてもらえたらしいですね。自然やお店を大切にしてくれる人に、何回も来てもらいたい。あと今日は話していたら、この町にいる人も含めて、いいところだなあと思って（笑）。

一同（笑）

榎本 だから望む人がいるなら、移住もぜひしてほしいですね。食堂をやつていると、移住の情報がないか問い合わせがあるんですね。この前もリピーターのご家族が「そもそも移住しようと思って」と話していて、私に何かできないかな、と考えています。

ーこの地域を愛する人たちが、着実に増えているんですね。

井出 弟子屈町は人口減少がすご

く進んでるので移住も重要だし、あとはもうひとつ、子どもたちが戻つてきたい町にしたいです。子どもたちと接していると、「ずっとここで過ごしたい」と思つてゐる子が多い気がして。けれど、やりたいことをやるために勉強や就職が、ここだけじゃ足りない可能性があるんですよ。それで外に出た後、戻ってきた子たちが川湯のどこかに就職するにしても、仕事が必要でしょう。ここが大好きな子どもたちが、戻りたいときに戻つてこられる場所があるようになつたんですね。

片瀬 私も高校を卒業するタイミングで川湯で仕事を探したんですけど、現状だと正直、選択肢は少ないと思います。たまたまこの仕事を紹介してもらわなかつたら、私が弟子屈町の外に出る未来もあつたはずで。あとは住む家もなかなか見つからなくて…移住してくる方がよく家を探しますよね。せつかく「戻りたい」「移住したい」と思う人がいるなら、いつも歓迎できる町にしたいなつて思つうんです。だから、仕事も家も含めて外から入りやすい環境を整えて、川湯を「戻つてこられる場所」にしていきたいですね。



国立公園とともに 発展した美幌町

資料に残っていますけど、昭和9年に国立公園になったとき、美幌の町中が歓喜に沸いたんですよ。当時の方々にとつて誇りだつたんでしょう、「國の公園になつた」と。その誇りを大切にしていたし、美幌峠への来訪者が急増したので、ここを拠点としていろんな商売もやられたみたい。だから、観光協会をつくらなきやいけないっていうのが始まりで。オホーツク管内で美幌の観光協会は、最古の歴史があるんです。

38年前か。引っ越してきて初めて美幌に来たときの景色を、今でも覚えています。汽車で美幌駅に降り立つたら、今の阿寒湖畔の町並みのような感じだったんですよ。「阿寒国立公園へようこそ」みたいなアーチがあつて。実際の国立公園エリアは、美幌の町中から約25キロ離れたところなんんですけど、町中にはたくさん宿と、バス会社、土産物屋といった、国立公園を拠り所とする商売をやられてました。阿寒国立公園っていうのは美幌町みんなの飯の種でしたから、私も引っ越してきましたから、国立公園への意識ってのは大きいありました。

美幌の観光客数のピークは、昭和30年代から40年代。映画のロケとクッキー騒ぎがあって、年間130万人くらい人が来てた。峠の絶景と、話題性があつたんですね。今は50万人、60万人の世界なんだけど、そういう

一大観光地でした。

そして時代とともに、国立公園っていう意識がだんだん消えていったんです。もう駅前のアーチもないですし、土産物屋さんも宿もほとんどなくなりましたから。美幌町民の気持ちは、なんとなく国立公園から離れていく。そういう寂しい変化をね、なんとかしないなっていうのはありますよ。

「縁の下系」から牽引役へ

藻琴山から美幌峠を通り、津別峠まで繋げる「屈斜路カルデラ外輪山トレイル」の構想は、以前から存在していて。それを形にしよようと、津別町と大空町、美幌町の3つの町から成る観光協議会で協議して、足かけ4年になります。

僕ね、長い距離を歩くこととか、特別好きでも嫌いでもなかった。トレイルの構想を何とか調整しようと、事務担当として仕事に取り組むのが先で。でも構想が始まつた頃、いろいろなワークショップで関係者や地元の有志の方々が集まつても、みんな尻込みしていました。誰が管理するかが不安だと、事故がおきたら誰が責任を取るんだとか、維持管理のお金を出さんといけないだとかを、探つてます。本当にやるつてところまでいってない。

そのなかで、「信太さんがやるんだつたらやります」とか「信太がやれ!」みたいなことを口々に言われるんです。やっぱり牽引役

聞き書き

信太真人さん

暮らしも自然も、守り続けるために。

ロングトレイルで、地域の進む道を拓く



屈斜路湖の北西部を藻琴山から美幌峠を通り、津別峠まで結ぶロングトレイルの構想。実現に向けて中心的な役割を担うのが、美幌観光物産協会・事務局長の信太真人さんです。

もともとトレイル自体にはあまり興味がなかったという信太さん。それでも構想を実現させようと奔走するのは、町の人々が自然豊かな地域に誇りを持つこと、そしてここでの暮らしを未来に繋ぐことを、願っているから。そんな信太さんに、活動に対する思いと展望をお聞きしました。

しだ・まこと／1974年、広島県出身。幼少期に家族で美幌町に移住し、2003年から美幌観光物産協会で勤務。現在は事務局長として、観光に関わる事務全般を担当。美幌町を中心とするロングトレイル構想に携わり、企画や調整における牽引役を担う。

でいます。

い情熱を持つ。

自衛隊の方々以外にもね、そういう仲間たちがたくさんいるんですよ。「トレイルがでかけるよ」って言つたら、眼キラキラさせて「俺も連れてつくれ」って人がいる。そういう土壤があるのは、ものすごいアドバンテージです。頼もしいですよ。



がないと、ダメだなっていうのを、2年目あたりで気づきました。それに、トレイルができた後のこと想像すると、うまく観光の資源にすれば、国立公園の魅力がものすごく伝わる。「これはやらんといけない」っていう気持ちが芽生えましたね。まだまだ課題は多いんですけど、みんなでおそるおそる周りを見るんじやなくて、引っ張る人がいないんなら自分が引っ張っていく役目にもならないとダメだな、と感じているところです。

僕がトレイルに興味を持ったのは、陸上自衛隊美幌駐屯地のOBの方たちが、トレイル調査を力強く引っ張ってくれたから。一緒に

藪の中を漕いでくれて。僕はついてつただけなんですけどね。

というのも、自衛隊で教官をしてた方に、トレイルの構想を話したんですよ。そしたら「行こう行こう」って。それでもう8キロぐらいくんです、藪漕ぎを。こっちは息が上がりながらハアハア言いながらついて行ってるのに、その人はウキウキして何かしゃべりながらね。しゃべれないでしょ、こっちは（笑）。それに、来たのはいいけど、帰れないんですけど。もう、心折れますから。それでも、ずんずん引っ張ってくれる。「ここは絶対、道にしましょう」って、僕なんかより何倍も熱ないです。

ふるさとみんなが、認めるものを

観光はね、考えようによつては、単発の新しい企画を数打つ繰り返しでもいいんです。ネタが続けば。だけど僕は、一本の確固定するふるさとみんなが「これなら我々も楽しめる、未来に繋げていける」と認めるもの、何十年もずっと残るものを見つくりたいっていうのがずっとあります。そのひとつがトレイルなのかなって信じて取り組ん

トレイルを拓く

花を見て散策するのも国立公園ですが、そこにもうひとつ、環境に負荷のかからないようなものを提供できれば、地域経済の活性化になると思ってます。ひとつは人。ガイドです。残念ながら今の美幌には、ガイドがない。文化や歴史、自然に関心を持つお客様さんは多いですから、いろんな引き出しを持っているガイドを育成するのが、美幌におけるいちばんの課題でしょうね。そういう人がいれば、お客様さんはガイドにお金を払って、安心してトレイルと一緒に歩けますから。

だから4年前、美幌町と商工会議所、観光物産協会、森林組合や金融関係の人たちで、観光まちづくり協議会がつくられたんです。それを雇つて観光で稼ぐ、稼いで自走していく。そういう目標の組織ができました。これから何年、何十年かかると思いませんが、ガイド

ドを目指す方の思いが芽吹いて、将来そういう人が活躍できる場であつてほしいですね。

そうやって体験を提供できる状態になるまで、ずっと発信していくことが必要です。ガイドだけでご飯食べるのって難しいですから。これだけの景観で、世界にまれに見る外輪山を歩くるルートを、どうやってPRするのか。インバウンドも今後復活すれば、欧米とかから絶対に目が向きますから。そこに至るためにはガイドを育成していくのが、課題ですよ。

このトレイルは全長約22キロですから、手頃ですよ。距離が短すぎでロングトレイルじゃないとか言われるかもしれないですが、やっぱり景色を見て楽しんでいただく外輪山は、特別なルートです。将来は、摩周・屈斜路トレイルや北根室ランチウエイと接続

すること、さらに女満別空港・中標津空港・釧路空港が結ばれて「ロングトレイル」になることが目標。トレイルは今後、日本でもつとなんじんぐくると思いますよ。特に北海道つて、ぴったりの自然豊かな土地、広い土地もありますから。

だからこそ、多くの人に知つてもらいたいと思ってます。そのためにはやっぱり、観光協会と3つの町の推進役となつて、トレイル体験だとか、フォーラムだとか、意見交換会を、エンドレスで企画していくことですよね。すでに「トレイルができたよ」だとか「こないだ環境省の方がトレイルを歩いてくれたよ」って広まって、早く歩きたがつてる人たちがいっぱいいますから。トレッキング・ハイキングとか、登山を愛好している人は相当いますね。だから一般の人により広く普及させるためにも、僕らが活動を止めないのも大事なことのひとつでしょう。

トレイルは今、調査道はすでに完成しています。整備して正式にオープンする目処としてはいるのは、2022年です。でも、そこで終わりじゃなくて、持続させることを先に考えておかないとね。維持管理とか並大抵のことをじやないけど、やっぱり運営母体がしつかり地に足つけてないと。持続ですよ。行政も含めて、きちっとした組織が、自然を傷めないで管理していく。そういうことを僕らが引き受け、お客様に楽しんでもらえる土地にしたいですね。



地域が一体になつて、トレイルを拓く

新しいものをどんどんやるもの、話題性といふか、サブでは大事だと思いますよ。だけど、流行り物は長続きしないんですよ。魅力的な大自然を「売る」ために人間があちこち踏み入つて荒らすのもダメですが、その前に住んでいくためには、ここで様ぐっていうことが必要なんじゃないかなと。この仕事を熱心ですが、残念ながらすぐに異動となつてしまつ。今のところ、このトレイル計画に最も長く関わっているのが僕なんですよ。やつてうまくいくんがあれば、頑張るしかなになつたら、もつたないじやないですか。ここに住んでる人たちが愛着を持って、長いこと地域が疲弊して過疎になつて、人がいなくなりながら、だんだんと感じてきましたよ。最初の頃は、仕事だからってやつてましたけども長く関わっているのが僕なんですよ。僕がやつていうことです。僕は「縁の下系」ですから、あんまりそういう牽引役のキャラじやないですけど。それでも、やらんといけないです。

やつてうまくいくんであれば、頑張るしかなになつたら、もつたないじやないですか。ここに住んでる人たちが愛着を持って、長いこと地域が疲弊して過疎になつて、人がいなくなりながら、だんだんと感じてきましたよ。最初の頃は、仕事だからってやつてましたけども長く関わっているのが僕なんですよ。僕がやつていうことです。僕は「縁の下系」ですから、あんまりそういう牽引役のキャラじやないですけど。それでも、やらんといけないです。

時代からして、かつてこの辺をバスが何便も周遊してた頃には、まず戻らないと思うんですね。人口も少なくなつてきてるしね。じゃあどうするかってときに、綺麗な景色を「綺麗だ」で終わつて次行こうつてなるよりもその土地を「体験」してもらわう。立ち止まつて見てみる。そこで遊ぶ。何か食べてもらわうとかでもいいんですけどね。トレイルができる今はキャンプするとか、歩るとか。それらをお客さんに体験してもらうことで、経済活動や人の交流に繋がつていきます。そうしたら絶対、町民が国立公園にもつと目を向けてくれると思うんですよ。

自然のなかにあるストーリーを大事にしたい。

屈斜路湖に望む「静かな観光」

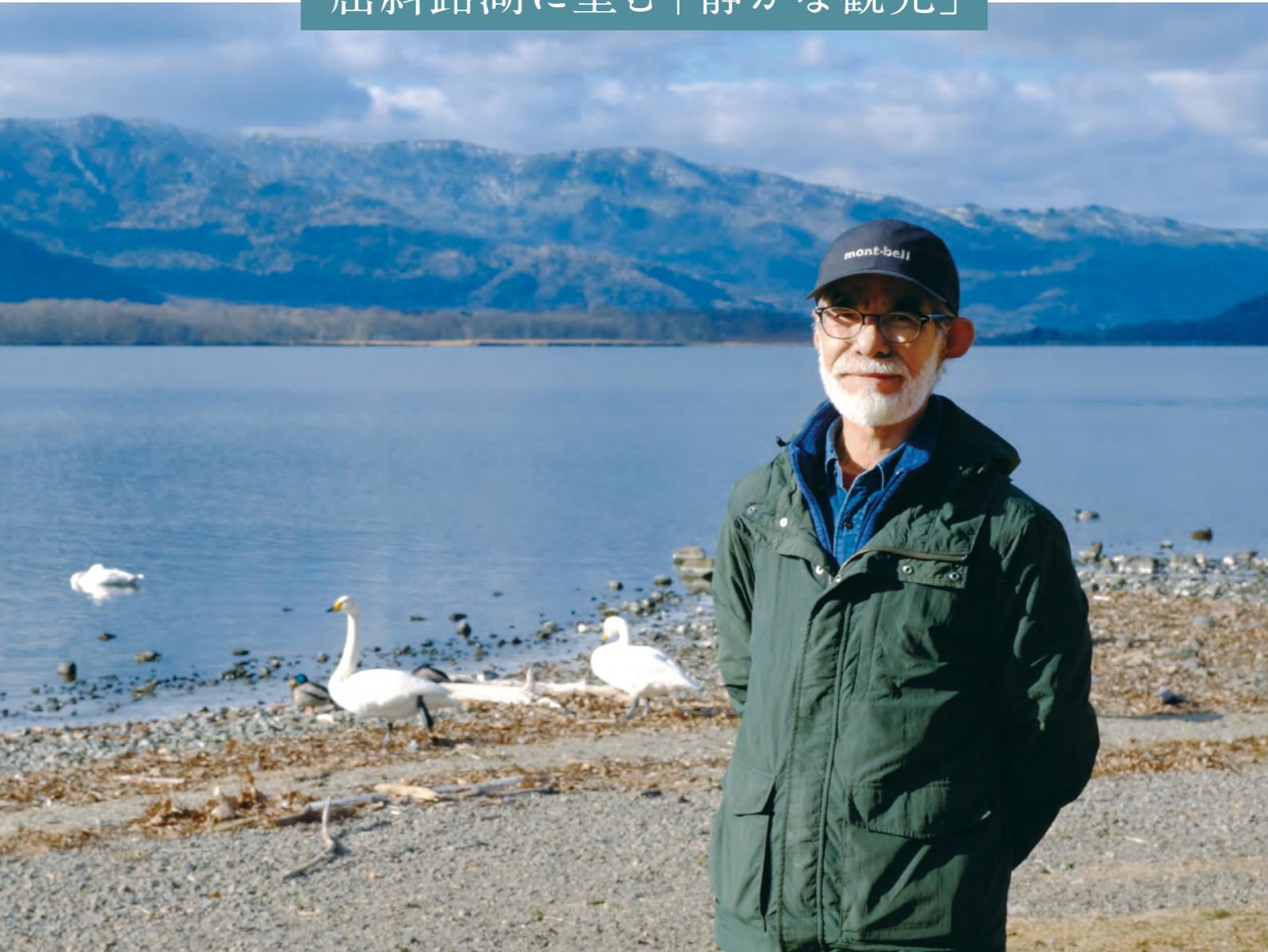


屈斜路コタンから探る新たな表現

僕は屈斜路古丹（コタン）生まれ、屈斜路コタン育ち。父もここ出身で、母は音更町出身。両親ともにアイヌ民族です。松浦武四郎がこのコタンに来た1858年は、7戸くらいの集落だったと、文献『久摺日誌』にはあります。先祖であるイソリツカラは、コタンの中ではエカシだったようです。その後が、武四郎に屈斜路を案内したということを、後に松浦武四郎記念館の館長になる高瀬英雄さんが教えてくれた。武四郎は、うちの一族の名前を全部書き残していたの。そういう先祖の歴史は、館長さんに出会わなければ知らないまだつただろうな。武四郎記念館がある三重県松阪市まで呼ばれて、高瀬さんと対談したことがあるよ。

両親とも木彫りをやっていたから、僕も見よう見まねで小、中学校の頃には彫つていた。この道45年以上。2007年に屈斜路湖畔に自分の民芸品店「Kussharo Factory」を開いた。でも、木彫りの定番である熊はほとんど彫つてない。「野生の熊を見るまで彫らない」と決めていたから。4、5年前に初めて熊と出合って、熊の頭の木彫り作品を3つだけ作つた。1つは売れて、2つは道の駅「摩周温泉」に飾つてあるよ。

熊をあまり彫らなかつたもうひとつの理由としては、叔父の磯里明が、熊彫りとして有名だつたから。叔父は旭川で熊彫りを勉強し



日本最大のカルデラ湖である屈斜路湖。その湖畔にある屈斜路コタンで生まれ育った磯里博巳さんは、アイヌの木彫り作家として伝統を受け継ぎつつ、自然からインスピレーションを得た斬新な作品で、地域の魅力を伝えています。

かつて松浦武四郎にコタンを案内した先祖のこと、雄大な自然に学び遊んだ少年時代、屈斜路湖から見た観光の変遷と未来に望む姿。この地に暮らし続けてきたからこそその思いをお聞きしました。

いそり・ひろみ／1960年、弟子屈町屈斜路湖畔にあるコタン生まれ。アイヌ民族の両親のもとで木彫りを覚える。2007年、パートナーの斎藤敬子さんとともに、オリジナルデザイン&ハンドメイドのアイヌ民芸品制作・販売を手掛ける「Kussharo Factory」を開設。木彫りの他にも、エゾシカの角や革、アイヌ文様を熔けこませた自作のガラス玉などを使って、アクセサリーや装飾品を生み出すといった創作活動に励んでいます。

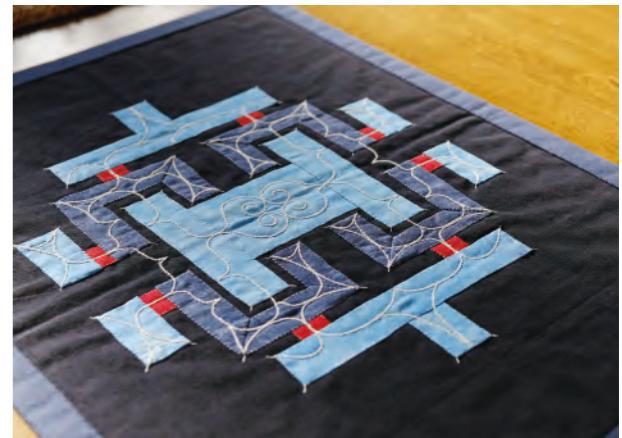
国立公園内の二つの個性と
「静かな観光」

「静かな観光」をしていくために、木彫りにガラス玉を施したりね。自然のなかにあるストーリーを彫つていいたい。屈斜路の自然は、僕の作品づくりになくてはならないものです。



屈斜路湖と阿寒湖。同じ国立公園内でも、この2つの地域は個性が違う。僕は以前、戸竹喜さんのお店で店員をしていましたこともあるから、阿寒湖の人たちとは顔なじみ。そういうネットワークをつくって、繋がりを大事にしたいね。阿寒は昔から大きな旅館やホテルがあつて、にぎやか。そんな観光地があるといい。一方、屈斜路湖は静か。そこがいいんですよ。

60年間ここで生きてきただけだから、国立公園に住んでいるという意識を強く持ったことはないね。ただ普通に、周りに存在していた。地元の人間からすると、国立公園であることが特別すごいとは思っていないんじやないかな。よく「美しい」と褒められる摩周湖



磯里さんの自宅ギャラリーにて。磯里さんがシナノキで作った皿と、パートナーの斎藤敬子さんが屈斜路の自然をイメージして作ったアイヌ刺繍作品

が近くにあることも含めて、この環境は生活の一部なんですね。

国立公園であることを、地元住民も観光客も意識するようになるには、もっともっと綺麗な地域にしていかないとね。綺麗に、汚さないように観光する。実際、そういう考え方になってきてると思うよ。来年度から、屈斜路湖で動力船の乗り入れを規制する取り組みも始まろうとしている。先ほども言つたように屈斜路湖は「静かな観光」、そこが大事なんです。

昔は、湖で動力船の音なんて聞こえなかったし、遊ぶといえれば泳ぐしかなかつたけれど、それだけで楽しかった。自然のなかで遊ぶのが日常だつたんだよね。中学生から山菜

成したら、松浦武四郎のことを教えてくれた高瀬さんを最初に乗せたいな。

同じ国立公園でも、屈斜路湖では、阿寒湖とはまた違う楽しみ方を見せたい。しつこいようだけど、静かに楽しめる観光だね。去年、シマフクロウを初めて見たんだよ。幼鳥だったから、この辺で生まれたということだよね。タンチョウだつて営巣しているからなあ。守つてあげたいじゃん。そんな屈斜路湖畔の素晴らしさを感じてもらいたいから、「まず、来てみてよ!」と言いたい。ここからどこかに移り住むつもりもないし、ここがいい。うん。唯一無二の場所。いいところだよ。

いるよ。そういう体験観光を継続していくける拠点も作りたいな。

今、屈斜路コタンでは15人ぐらいのアイヌが暮らしている。それぞれ考え方は違うだろうけれど、僕自身は、派手な演出でアイヌを宣伝するよりも、もっと素朴な見せ方の観光を模索していきたい。観光客にアイヌの原点を見てもらった上で、いろんな表現を展開していけばいいと思う。

そういう意味でも、僕はアイヌとして丸木舟を作る。150年前、先祖のイソリツカラの案内で、松浦武四郎は屈斜路湖を舟で回った。自分の中のアイヌの血が騒ぐというか、その歴史を受け継ぎたい思いがある。舟が完

採りにはまって、今も山菜シーズンになると「ギョウジヤニンニクが生えてきたから行かない」と！僕に採られるのを待っているんだから

（笑）。ジャガイモの収穫時期になれば、小学生30人で農家さんへ手伝いに行つた。おやつをもらえるのが楽しみだつたなあ。あとはパイロットファームにビニール袋を持ってお尻で滑り降りるとか、弓を作るとか、素朴な遊びばかりしていた。小学校は、普段は屈斜路湖畔をぐるりと回つて通学していたけれど、冬になると凍つた湖の上を歩いて対岸まで渡つたもんだよ。冬限定の近道だね。迷わないように、大人がマツの枝を道しるべとして置いてくれてさ。

その頃と今の風景は何も変わらないけれど、50年ぐらい前の観光客の数はもつとすくなかつた。ツアーバスが5台も10台も連なつて来るのが普通。集団で来て、綺麗な景色を見て帰るという観光だね。修学旅行生もいっぱい来ていた。今の観光は、違う形に変わってきている。静かになつたよ。僕はそのほうが好き。

最近だと、摩周・屈斜路でトレインのルートを開発している。そういった静かに遊べる屈斜路湖に、全国から人が来てくれる流れになつてほしいと思う。大きなホテルを建てるのではなく、小さくとも泊まつてみたいと思わせる宿にお客さんを呼べたらいいんじゃないかな。せつかくなら、そんなふうに開発してほしいな。

生きた証に、丸木舟を

もちろん、民芸品を作っている身の上としてはそれで暮らしていかなければならないから、観光客に買ってもらえるようなものを作りたい。昔は黙つても何でも売れる時代があつたけれど、今は違うでしょう。逆に、良い物だつたら高くても買う人が増えていく。量より質という流れになつていて、そういうお客さんに来てほしいね。

木彫り熊だけではなく、何でも彫れるような腕がないと生計を立てるのは難しい。僕の場合、木彫りはもちろん、壁掛けも作るし、鹿の角細工もするし、ガラス玉も作る。鹿の皮でバッグも作つてみたい。やりたいことがいっぱいあって、突き詰めていた結果、何でも作れるようになった。僕なりのものを作り方や売り方で、ここで暮らしていけば、という感覚で生きています。

これからやりたいのは、自分の生きた証、作家として代表的な作品を残すことだね。今は、丸木舟を作りたいと思っている。来年から屈斜路湖への動力船乗り入れが規制されたら、「静かな観光」という意味で、湖に丸木舟を浮かべたい。できたら5、6艘作つて、来年のゴールデンウイークぐらいには人に乗れるようにしたい。観光客がアイヌ衣装を着て乗るのもいい。湖面でゆっくり楽しむだけでいい。騒音もない。昔ながらの遊びだけど、ぜいたくでしょう。木の皿にアイヌ文様を描いて彫るワークショップもやり始めて



が近くにあることも含めて、この環境は生活の一部なんですね。

成したら、松浦武四郎のことを教えてくれた高瀬さんを最初に乗せたいな。

同じ国立公園でも、屈斜路湖では、阿寒湖とはまた違う楽しみ方を見せたい。しつこいようだけど、静かに楽しめる観光だね。去年、シマフクロウを初めて見たんだよ。幼鳥だったから、この辺で生まれたということだよね。タンチョウだつて営巣しているからなあ。守つてあげたいじゃん。そんな屈斜路湖畔の素晴らしさを感じてもらいたいから、「まず、来てみてよ!」と言いたい。ここからどこかに移り住むつもりもないし、ここがいい。うん。唯一無二の場所。いいところだよ。

採りにはまって、今も山菜シーズンになると「ギョウジヤニンニクが生えてきたから行かない」と！僕に採られるのを待っているんだから

（笑）。ジャガイモの収穫時期になれば、小学生30人で農家さんへ手伝いに行つた。おやつをもらえるのが楽しみだつたなあ。あとはパイロットファームにビニール袋を持ってお尻で滑り降りるとか、弓を作るとか、素朴な遊びばかりしていた。小学校は、普段は屈斜路湖畔をぐるりと回つて通学していたけれど、冬になると凍つた湖の上を歩いて対岸まで渡つたもんだよ。冬限定の近道だね。迷わないように、大人がマツの枝を道しるべとして置いてくれてさ。

その頃と今の風景は何も変わらないけれど、50年ぐらい前の観光客の数はもつとすくなかつた。ツアーバスが5台も10台も連なつて来るのが普通。集団で来て、綺麗な景色を見て帰るという観光だね。修学旅行生もいっぱい来ていた。今の観光は、違う形に変わってきている。静かになつたよ。僕はそのほうが好き。

最近だと、摩周・屈斜路でトレインのルートを開発している。そういった静かに遊べる屈斜路湖に、全国から人が来てくれる流れになつてほしいと思う。大きなホテルを建てるのではなく、小さくとも泊まつてみたいと思わせる宿にお客さんを呼べたらいいんじゃないかな。せつかくなら、そんなふうに開発してほしいな。



継ぎたくない意思を覆した、 故郷の景色

私はね、高校卒業まではずっと弟子屈町におりました。その後3年間東京で、専門学校に通っていたんですね。23歳のときに川湯に戻ってきて、それ以降はずっと川湯で暮らしっています。なぜ東京の専門学校に行ったのか、それは、ホテルの仕事から逃れたかったからです。親の背中を見ているとね、盆が正月も全くない。昼も夜もなく働いているというのはね、やっぱり10代の私にとっては非常に重いことでしたから。もう、嫌で嫌でしようがなかつたんですよ。

ただ、私は4人きょうだいの中、ただひとりの男なんですよ。やっぱり当時といえば「お前長男なんだから家を継げよ」ということを、10代どころか一桁のときから暗黙のうちに言わっていました。見えないレールがずっと敷かれていたんです。だから、この仕事をからいかに逃れるか。それがティーンエイジャーの私にとって最大のミッションだったんですよ。「絶対にホテルなんて継ぎたくない」と思っていました。川湯を離れようと思つたのも、地元が好きだと嫌なとかいう前に、ホテルの仕事を継ぎたくなかったからです。それでも川湯を離れてた時期に、ときどき帰省はしていました。20歳前後のときですかね、確かに私が東京から釧路空港に戻ってきたんだと思うんですけど、父親が空港まで迎えに来てくれました。で、「免許取ったんだから、

川湯に目を向けてもらうために、「面」で発信する

自分で運転しろ」と言われまして、自分で運転して川湯まで戻ってきたんですね。そのとときに釧路から弟子屈の市街地を過ぎて、硫黄山の道路に入っています。あそこに植生の変化がありますけども、緑のトンネルをくぐり抜けた瞬間、ぱっと視界が開けます。左側に硫黄山があって、正面に帽子山が見える。その景色を見た瞬間に私の心に芽生えた気持ちっていうのが、今でも忘れられないんですけれども。「今見えているこの景色のなかに、どれだけの生き物がいるんだろう」と。それは人間もいるんでしょうし、昆虫とか狐とか、鹿もいるでしょう。目には見えない生き物も含めて、ここには数えきれないたくさんの命があるんだ、と感じました。これが、私に川湯に戻ろうと思わせた最大のターニングポイントになつたんです。もちろん、同じ景色を何度も見てきましたよ。だけれどやっぱり東京から帰ってきた私の目にはですね、いつもとは違う、目に見えない部分を感じたわけですよ。それまでは家を継ぎたくないものだから、いかに行方不明者になるかを考えていたんですけどね（笑）。そのときから、自分の考えが変わりました。その3年後、私は川湯に帰ることになります。戻ったばかりの頃が、ホテルも川湯も最盛期で、とにかく忙しい日々を過ごしました。

聞き書き
中嶋康雄さん

始まりは、一枚の絵だった。

「森の中にある温泉街」ができるまで



阿寒摩周国立公園の満喫プロジェクトにおいて、川湯温泉で掲げられたコンセプトは「森の中にある温泉街」。実はこのアイデアは、川湯観光ホテルの中嶋康雄さんが描いた「絵」から生まれたものでした。イメージを多くの人と共有できるように、中嶋さんが1枚の絵に落とし込んだ川湯の未来図から物語が始まり、現実のものとなろうとしています。

中嶋さんが引き受けた責務と、川湯を盛り上げるために最前線で奔走し続ける原動力についてお聞きしました。

なかじま・やすお／1967年、弟子屈町川湯生まれ。川湯観光ホテル代表取締役。専門学校に通うために上京し、23歳で川湯に戻る。32歳で川湯観光ホテルの社長を継いで家業に注力する一方で、てしかがえこまち推進協議会の活動や、株式会社ツーリズムでしか（現在の株式会社ツーテシ）の代表取締役社長、摩周湖観光協会の会長を歴任。自作の紙芝居やムックリを使った案内が人気。



私は川湯に憧れてここに住んでいるわけでもなく、ホテルをやつてた家に自分で選んで生まれたわけでもないんですよ。「それの中嶋さん、なんであれもこれも、そんなに一生懸命頑張ってるの?」って聞かれることがあります。たしかに、今までいろんな役職をやってきました。2008年に観光を基軸としたまちづくりを進める「てしかがえこまち推進協議会」の立ち上げ、2009年には着地型旅行業を手がける「株式会社ツーリズムてしかが」の立ち上げに関わって、一時期は年間で300日くらいツーリズムてしかがの仕事をしていました。ようやく小さな芽を出せるまでに、ここでは語り尽くせない歴史があります。あとはこの前まで、摩周湖観光の会長もさせていただきました。そしてもちろん、自分のホテルの仕事をあります。

なぜこうやって地域に関わることをしていふかというと、ひとつのホテルでなんとかして集客しようとしても、なかなか力が及びません。非常に難しい。まずは、地域に目を向けてもらう必要があるわけです。地域の魅力を高めることができ、すなわちホテルの集客に繋がる。これは不变の構図だと思いますね。やっぱり弟子屈町川湯に目を向けてもらわないと、川湯にもうちのホテルにも泊まつてもらえないですから。

そういうことを考えているから、紙芝居をしたりするわけです。私が外国から来られるお客様をおもてなしするときに、今の摩周湖を見せるだけでもつたなさすぎる、といふ言葉で、「責務」と出たんです。

地域に関わる仕事をするのは、夢のためじやない

よく「夢は何か」って聞かれるんです。「中嶋さん、そうやって地域のことをいろいろやっているのは、夢があるからなんだよね?」と言われたように記憶しています。だけどそ

思ったのがきっかけで、このエリアの歴史や

成り立ちを伝える紙芝居をつくりました。実はこの絵は、自分で描いたものです。それが好評だったので、まあ図に乗つてどんどん増えていく。今エピソード5の構成中です。これを見て「中嶋は絵描きになつたほうがよかつたんじやないか」とかよくいじられるんですけど、私なりに言うとね、好きでやってるわけじゃないですよ。川湯温泉のこの状況をなんとかしなきゃならん、と窮鼠猫を囁んでいるだけです(笑)。お客様をご案内するときに、単に「硫黄山ですよ」「摩周湖ですよ」ではなくて、紙芝居で「私たちは今こういう場所にいるんですよ」と歴史や背景を伝えると、「ゆっくり見てみたい」「もっと知りたい」と思つてもらえるじゃないですか。

「20年前に行つたけど、また行つてみよう」という方も含めて、この地域に目を向けてもらいたい。そのためにはこの地域のことを伝えていく必要があるわけです。もう一度、振り向いてほしかった。その切実さをいかに楽しく見せるかということで、私はこうやって紙芝居をしています。

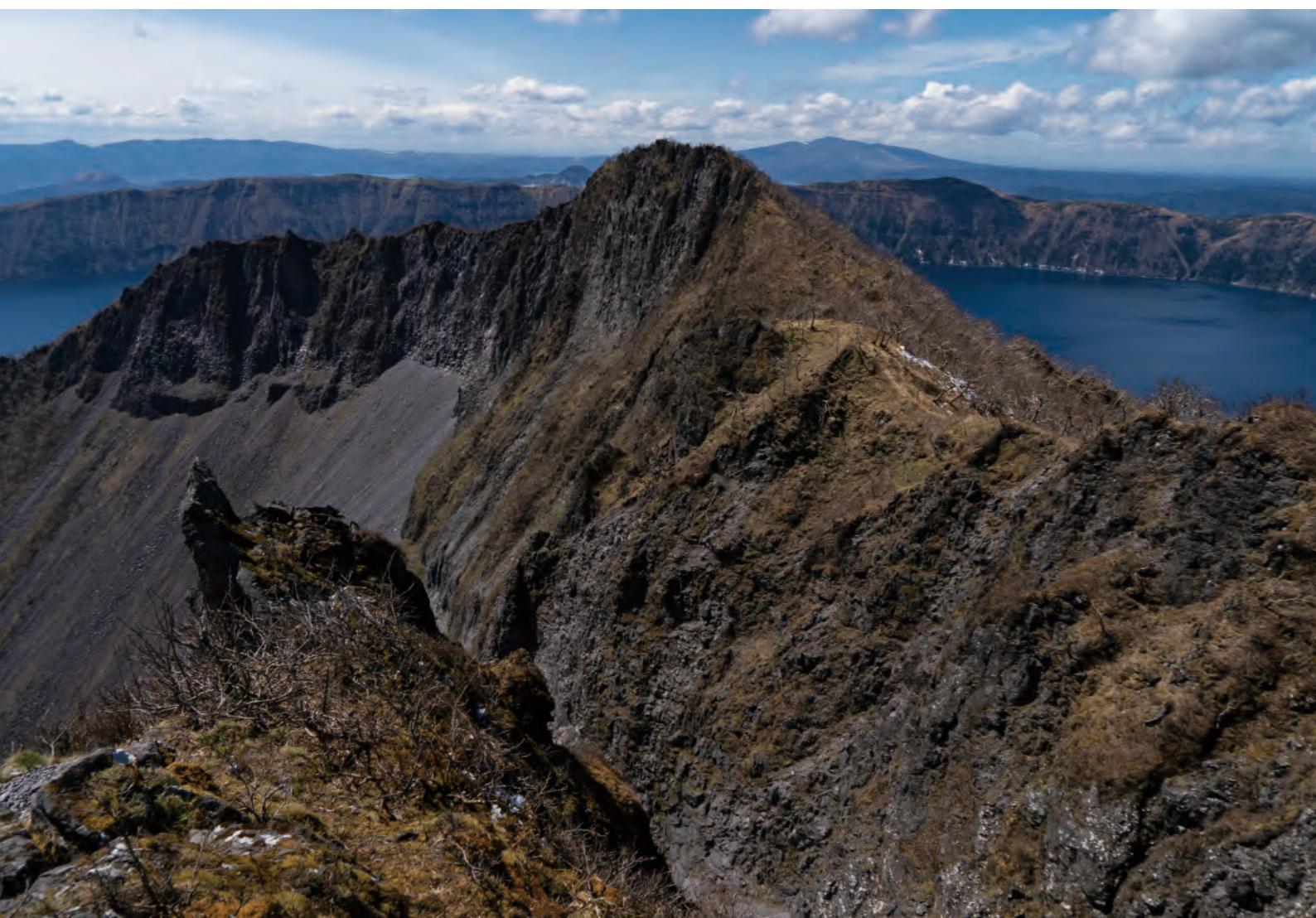
の言葉が、自分にはすごく違和感があつて、「いや、私は夢があつてやつてるわけじやないんだよね」と申し上げたんです。「だつたら何のためにそんなにやつてるの?」って聞かれて、すぐには言葉として答えることができなかつた。だけど、あえて言葉に置き換えるとすれば「責務でしようね」と。

その責務が何に対してものかと言つたら、地元よりも前に、まず自分の仕事に対する責務ですよね。自分が仕事ではないですから。ホテルには働いてくれている従業員さんたちがいて、その人たちには家族のみなさんもいるわけで。川湯の観光客が減つてきか」と、恐れを抱くようになつたんです。川湯の旅館は、この20年間で3分の1くらいに数が減つています。次はうちが倒れるんじやないか、と。で、もし方が一のときに川湯の地域に与える影響を考えると、もう夜も眠れないし、朝起きたら汗びつしょりだし。エンドレスの不安を抱えながら、毎日を送つていました。そんな私に、「地元のことを、今一度見つめ直してみませんか」と教えてくれた人がいたんです。そのときから、考えられることは全てやつてみました。「馬そりで行く硫黄山ヒストリーツアー」を企画したのも、その言葉がきっかけです。

地域の目標したい姿を描いた

川湯のお客様がどんどん減つて、ホテルも

お店もどんどんなくなつて。それを元に戻すのは、これは容易ではないなど。もし元の数に戻せたとしても、それが本当に川湯温泉としてふさわしいのか。ここに私はずっと疑問を持っていたんですよね。であれば、もう川



8か所の国立公園で、満喫プロジェクトが始まりました。北海道では唯一、阿寒摩周国立公園が選ばれまして。「それなら中嶋が描いた絵を実現するべ」ということで、川湯温泉と硫黄山では、「まちなみ等の景観整備」として「森の中にある温泉街」をコンセプトにすることが、正式に採択されました。

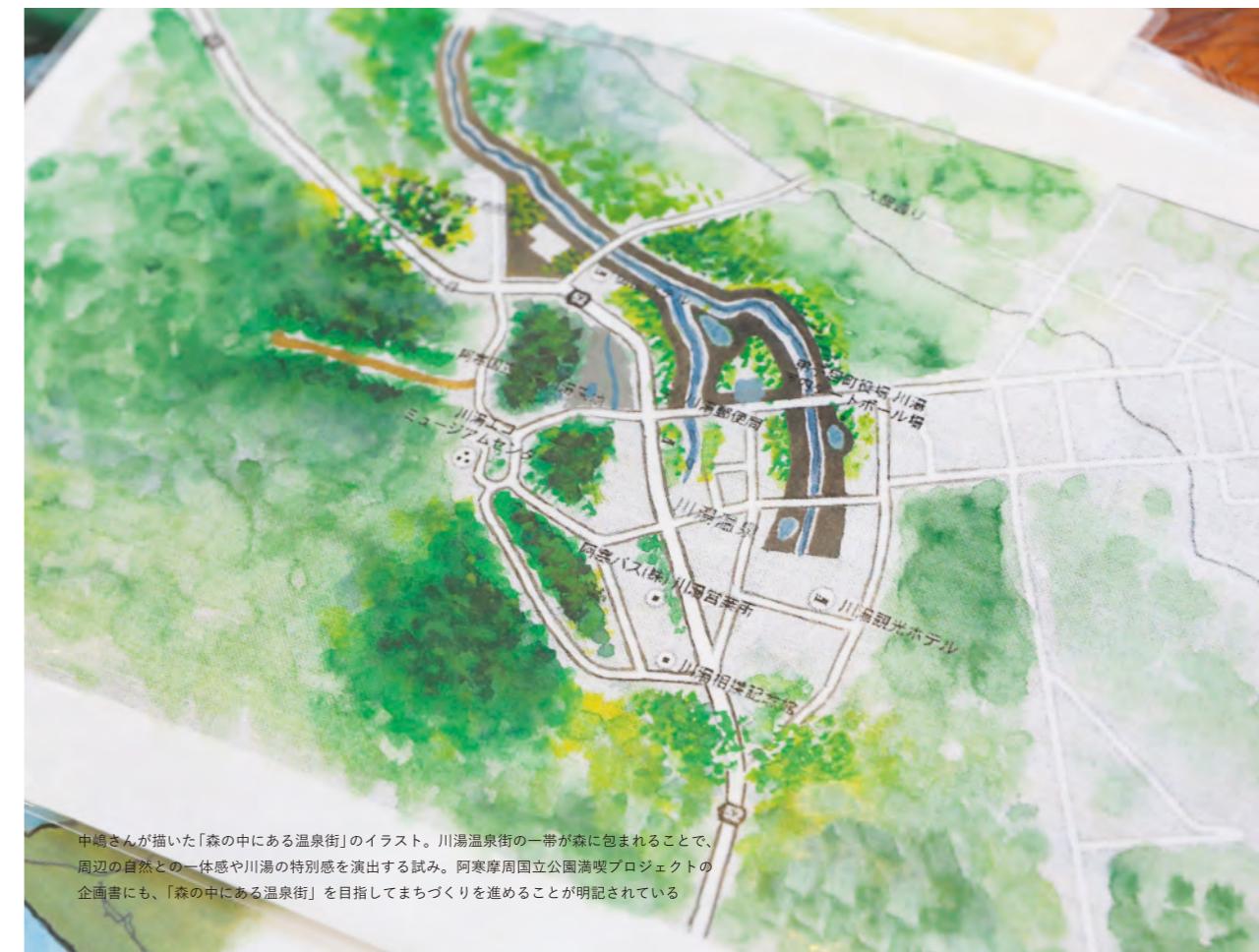
とはい、「なんだ、満喫に選ばれても何も変わらないんじやん」って思う方も多かったかもしれません。しかし、2020年になつて目に見える変化がおきてきたんですよ。環境省による整備の他に、弟子屈町によつて温泉川の遊歩道化工事が動き始めて、2021年に完成します。地域のみんなで出したアイデアが、川湯の未来を予言したんです。

何もつくらなくても、地域の価値を上げられる

「森の中にある温泉街」の構想を通じて今の弟子屈・川湯が何に挑んでるかというと、「静かさを価値にすること」なんですよ。今まで大型バスが組んだルートで観光する時代でしたから、阿寒があって知床があつて、川湯、弟子屈、摩周湖はどうしても通過されがちでした。だけど今は時代が変わり、お客様が行きたい場所を自ら選ぶ時代です。そういう時代に、ワーケーションや長期滞在の拠点として、川湯は最適な場所だと思います。観光のお客様も、昼はアクティブに阿寒に行つたり網走に行つたりして、あとは川湯に

戻ってきて夜は静かに過ごす。もちろんお仕事をするにも、静かな環境はいいですね。そう考えると、静かさは価値になるんです。これまで、にぎやかさや豪華さが価値として認められやすかつた。でもこれからは、静かなことを価値として発信できる時代です。そのためには、やはり住んでいる人が「何もないから価値が低い」ではなく、「何もないことが価値である」と思えることが重要です。でしがえこまち推進協議会のスローガンとして「誰もが自慢し、誰もが誇れる町」がありますが、それに近い気持ちですね。静かなことが価値である、これを私たちが伝えたいと思います。

静かさを価値にするというパラダイムシフトは、決して何かを新しくつくることではありません。私は地元に対し「美しい」「素敵だ」という感情だけではないと申し上げましたけど、川湯はやはり、素晴らしいと思います。昔から変わらずね。ここに今あるものの価値を「再定義」できたら、地域の価値を上げることができます。今あるものは何かに守り、価値にするか。そのことを続けていきたいし、若い人にもぜひそう考えてみてほしいなと思います。今ここにあるものは何の意味もなく存在しているのではありませんから、その背景を想像し、思い描いてみる。それを周りの人々に伝えていく、そのことが大切だと思うんです。そう、地元のことを探るといふね。これを一緒に進めていきましょう、と。そのように思っています。



中嶋さんが描いた「森の中にある温泉街」のイラスト。川湯温泉街の一帯が森に包まれることで、周辺の自然との一体感や川湯の特別感を演出する試み。阿寒モ周国立公園満喫プロジェクトの企画書にも、「森の中にある温泉街」を目指してまちづくりを進めることができることが明記されている

湯を森にしてしまおうと。温泉街に緑を増やしましようという発想とは逆で、森の中にお店やホテルが並んでいます。そういう街をつくつたらどうかということを、私が当時しゃべっていたんですけども、「中嶋 話だけじゃよく分からんから、何かつくれ」と。そう言われて2014年に描いた絵が、これなんですね。そのときに、何人が集まつてもらって意見をもらうわけです。「川湯を 森にしたらいと思うんだけど」「温泉川の周り、ウツドデッキを造つて歩けたらどう?」「ここに廃屋になつたホテルがあるからイベントスペースにしよう」と。みんなが見ているなかで、この絵に色を塗つていきました。なんで

湯を森にしてしまおうと。温泉街に緑を増やしましようという発想とは逆で、森の中にお店やホテルが並んでいます。そういう街をつくつたらどうかということを、私が当時しゃべっていたんですけども、「中嶋 話だけじゃよく分からんから、何かつくれ」と。そう言われて2014年に描いた絵が、これなんですね。そのときに、何人が集まつてもらって意見をもらうわけです。「川湯を 森にしたらいと思うんだけど」「温泉川の周り、ウツドデッキを造つて歩けたらどう?」「ここに廃屋になつたホテルがあるからイベントスペースにしよう」と。みんなが見ているなかで、この絵に色を塗つていきました。なんで



「森の中にある温泉街」のイメージ写真。川湯にすぐにある魅力を、森が引き立てる。馬車で硫黄山や川湯温泉街を巡るプランも、実現に至るまで中嶋さんが奔走した



かつて、私の頭の中に構想はあつたんだけど、自分ひとりでは全然発展しませんから。そうやって完成した絵を、300枚くらいカラーコピーしていろんな人に説明してきたわけです。町内の関係者をはじめ、旅行会社にも、テレビにもね。2014年から、現在までずっとです。それでこの絵がどこまでいったかというと、私ね、この絵を持って2015年に環境省の本省に行つて、担当の方が絵を見て「ぜひ考えますね」と言ってくれました。

もちろんこの話をしたからというわけでは絶対にないんですけどね、翌年何がおこつたかというと、2016年、全国から選ばれた

地域と環境省が手を携えるまちづくり。 阿寒摩周国立公園が目指す未来



徳永 哲雄

とくなが・てつお／弟子屈町長。弟子屈町出身。



大西 雅之

おおにし・まさゆき／NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構理事長。鶴雅ホールディングス株式会社代表取締役社長。釧路市出身。



笥渕 紘平

ささぶち・こうへい／環境省阿寒モニタリング事務所所長。



モデレーター 川上 榛輔

かわかみ・りょうすけ／弟子屈町地域おこし協力隊。2020年10月から弟子屈町に着任。



環境省が「地域づくりのパートナー」になつた

阿寒モニタリング事務所は、未来に何を繋いでいるのか。この問い合わせで開催された特別鼎談イベントには、約50名の地域の方々が参加されました。さらに、当日は会場である川湯ふるさと館から生配信を実施し、全国各地から1000名以上が視聴。国立公園への関心の高さがうかがえます。最初に、環境省阿寒モニタリング事務所・ 笥渕所長が、国立公園の変遷について説明しました。2000年代後半からの人口減少に伴い、地域の経済活性化における柱として観光政策が各地で展開されます。同じタイミングで2016年に環境省が始めたのが、「国立公園満喫プロジェクト」

環境省といえど事業者さんや地域住民の方々に対しても開発規制をする「規制官庁」のイメージがあると思います。しかしこれからの国立公園は、持続可能な観光地のモデルとなり、先駆的な存在になつていく。そのため環境省は、事業者さんや地域住民の方々とともに「地域づくりのパートナー」となつていきたいと考えています」

地域と環境省は、対等なパートナー。その言葉に対して、弟子屈町長・徳永哲雄さん、阿寒観光協会まちづくり推進機構の理事長・大西雅之さんは、5年間の満喫プロジェクトにおける環境省との関わりを振り返りました。

徳永「満喫プロジェクトを通じて、地域や事業者だけでは実現できなかつたことが動き始めた手応えを感じています。観光客数が減少して温泉街が寂しくなってきたなかで、廃屋を整理したり、トレインをつくつたりと、新しい動きが生まれました。特に実感しているのが、住民が地域づくりに対し、自主的に汗を流そうとする町になつてきたこと。これは、環境省や住民のみなさんのおかげだと感じています」

国立公園での暮らしですが、持続可能であるために

阿寒モニタリング事務所は、未来に何を繋いでいるのか。この問い合わせで開催された特別鼎談イベントには、約50名の地域の方々が参加されました。さらに、当日は会場である川湯ふるさと館から生配信を実施し、全国各地から1000名以上が視聴。国立公園への関心の高さがうかがえます。最初に、環境省阿寒モニタリング事務所・ 笥渕所長が、国立公園の変遷について説明しました。2000年代後半からの人口減少に伴い、地域の経済活性化における柱として観光政策が各地で展開されます。同じタイミングで2016年に環境省が始めたのが、「国立公園満喫プロジェクト」

登壇者は、弟子屈町長・徳永哲雄さん、NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構理事長・大西雅之さん、環境省阿寒モニタリング事務所・ 笥渕所長の3名。鼎談から浮かび上がったのは、環境省と地元住民が対等なパートナーとして地域づくりを担う未来でした。

登壇者は、弟子屈町長・徳永哲雄さん、NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構理事長・大西雅之さん、環境省阿寒モニタリング事務所・ 笥渕所長の3名。鼎談から浮かび上がったのは、環境省と地元住民が対等なパートナーとして地域づくりを担う未来でした。

です。日本の国立公園を世界に通する「ナショナルパーク」にするために、全国8箇所の国立公園で先行的・集中的に、インバウンド対応に取り組むことになりました。そのひとつとして選ばれたのが、この阿寒モニタリング事務所です。2020年を目標に進められてきた満喫プロジェクトによって、阿寒湖のデジタルアートプログラム「カムイルミナ」の開催や、川湯エコミュージアムセンターへのカフェコーナーの整備、川湯温泉における廃屋施設の撤去などが実現されました。今までの国立公園では考えられなかつたこれらの取り組みを先導してきた 笥渕所長が、国立公園における地域づくりについて考えを投げかけるところから鼎談が始まります。

笥渕「これまでの国立公園では、

大西「私は阿寒に帰ってきて40年近くになるんですけど、当時の環境省へのイメージは、屋根の形や高さ、看板の大きさなどの制限をする、まさに『規制官庁』のイメージでした。しかし、この満喫プロジェクトが始まってから、印象が大きく変わったんです。『カムイルミナ』にしても、音の大きさや光の強さなど、ひとつひとつご指示をいただきました。これも規制から入るのでではなく、『なんとか実現したい』『一緒にやるんだ』という気持ちがすごく伝わってきましたね」

笥渕「私は先輩たちから、『地域のために何が必要なのかを考えながら仕事をしろ』と言われてきました。なので、私自身は環境省の意識が変化したという認識ではありません。しかし、現場職員の数が少なく、最近は業務が多様化して量も増えているなかで、なかなか地域と丁寧に関わる時間を確保づらくなっているのかもしれません。満喫プロジェクトを通じて、地域との関係をあらためて築いていきたいと考えています」



離れて戻ってきた大西さんは「阿寒に戻ると決まつたとき、戻れる嬉しさを感じて涙が止まなかつた」と、それぞれの故郷への思いを紹介されました。そんな故郷の暮らしを次世代に繋いでいくために、新型コロナウイルスの影響も大きい今、どのような地域のありが求められると考えているのでしょうか。

本誌『自然の郷ものがたり』は、この満喫プロジェクトの一環として、地域の方々に自分たちの暮らしことを再認識しようと、国立公園の繋がりを再認識していました。この取材に同席したモデレーターの川上さんが、インタビューの際に象徴的だと感じた問いかけが、「あなたにどうして、国立公園とはどんな存在ですか?」というものです。阿寒摩周国立公園のエリアで生まれ育った徳永さんは「川湯の硫黄の匂いがする」と、故郷を感じる、阿寒を一度

る場所にしたい」という願いでした。そのために自分は何をするのか、この地域でどう動くのか。そとの問い合わせでいくひとりひとりに、地域の未来が託されています。

徳永「私は70年以上にわたって川湯を見てきましたが、経済的に栄えていた時代を経て、どのように地域をつくっていくのか。これは、地域に関わるみんなで力を合わせてどう生きていくか、という問いなのだと思います」

大西「我々の町は、前田一歩園

の『阿寒は切る山ではなく、観る山にすべきである』という考え方によつて守られてきました。そして、自然と共生するアイヌ民族がいる。この2つの哲学を住民が持てていて、阿寒の自然が守られています。この2つを大切に受け継いでいきたいです」

2016年からスタートした満喫プロジェクトは、2020年をひとつの区切りとしながら、今後もさまざまな取り組みが続いています。満喫プロジェクトは、単にインバウンドを増加させることだけが目的ではありません。日本の国立公園において自然と共生した持続可能な地域づくりを実践し、そのような地域のモデルを世界に示していく役割があるのではないか――。そんな思いを込めて 笹瀬所長が紹介した言葉で、イベントが締めくくられました。

「日本の人々が、過去の伝統と現在の革新の間の得難い均衡をいつもでも保ち続けられるよう願わずにはいられません。それは、日本人自身のために、ではありません。人類の全てが、学ぶに値する一例をそこに見出すからです」(クロード・レビュイ・ストロース『月の裏側』)

徳永「新型コロナウイルスによつて感じているのは、地域みんなで力を合わせて乗り越えていかなければならぬということです。私は、弟子屈町で一軒の店も無くならないように支援していくうと進めています。きっと時間が解決することもありますから、誰も取りこぼさない町のあり方を考えていきたいです」

大西「新型コロナウイルスで観光客数が減少して阿寒湖温泉は大きな打撃を受けましたが、そういうときに私をいつも勇気づけてくれるのは、アイヌ民族の生き方なんですね。東日本大震災のときにお客様がいらつしやらなくなり、ホテルもずっと休業状態になりました。商店街を回つたらみんなうつむいているんです。ところが、コタンに行つたら、みんなニコニコ

あとは、我々が若い頃からまちづくりを始めたときに『まりも家族憲章』をつくったんです。まりもというのは、一本の漢が集まつて丸くなった形なんですよ。それが可能なのは、阿寒の空気や水がから世界に発信しようという思いを込めました。でもこういう理念も、理念を用意するだけでは広がりません。しっかりととした経済基盤があることで、初めて理念を実践できる。このような地域のあります、国立公園において率先して実現できることだと思います」

大西「弟子屈は、若い世代のエネルギーがありますよね。阿寒でも見習いたいと思うと同時に、我々の町でも後継者が帰つてきているんです。やっぱり、後継者が帰つてきたいまちづくりをしたいと思ひますね。次の世代には、目標を高くしたチャレンジをしてほしいという思いを込めて、『可能の反対は不可能ではない、挑戦だ』といふ言葉を送りたいです」

地域の外から入つてきた笹瀬所長は、若い世代と関わるなかで感じたことを語りました。

笹瀬「地域の若い方々と話をすると、一緒に『自分たちに何ができるか?』を考えてくれます。さまざまな取り組みを進めるなかで地域の方々に『ありがとうございます』と声をかけられることがあります。が、地域の方々が思いを持つて動いてくださることで、我々もやりがいのある仕事ができているんですね。むしろ『一緒に取り組んでくれてありがとうございます』と言いたいと思っています」

人々の暮らしが自然とともにあり続けてきた、阿寒摩周国立公園。本誌のインタビューでも今回のイベントでも共通して語られたのは、故郷への思い、そしてこの故郷を「次の世代が帰つてこられ

していく。『大丈夫か? 持ちこたえられるか?』と聞いたら、『心配ない、食べられなくなつたら山に行くから』と。『これから必ず良くなるから、そのときに売れるものをつくるぞ』と、そうやってコタンの中で声をかけ合つて、そういう強さを見せていただきました。

徳永「今回の『自然の郷ものがたり』で取材を受けてくれたのが、私の子どもの世代です。その子どもから孫たちへと、地域への思いを受け継いでいてほしい。そのためには、特に先輩たちが、若くか。ここにかかっています。今の弟子屈では、笹瀬さんたち環境省の方々と、川湯の若い世代が一緒になって、地域の未来について本音で語り合い、力を合わせて、語り合っている。こういう積み重ねが、地域への思いを孫の世代へと受け継ぐことに繋がると思います」

大西「弟子屈は、若い世代のエネルギーがありますよね。阿寒でも見習いたいと思うと同時に、我々の町でも後継者が帰つてきているんです。やっぱり、後継者が帰つてきたいまちづくりをしたいと思ひますね。次の世代には、目標を高くしたチャレンジをしてほしいという思いを込めて、『可能の反対は不可能ではない、挑戦だ』といふ言葉を送りたいです」

大西「国立公園のあり方を、どう未来に繋ぐのか

経済を止めずに、自然とともに



自然の郷ものがたり

ここまでお読みください。じ地域で生きる方々の言葉を受け取つた今、どのような思いを感じていらっしゃるでしょうか。

この『自然の郷ものがたり』が完成した今 100 年先の未来に受け継げる冊子ができ、と私たちちは確信しています。なぜなら、100 年以上前からこの土地で大切に守られてきた自然と暮らし、そして地域への思いが、今回取材させてくださった皆様に受け継がれていて、そしてその皆様が 100 年先の未来を見据えているからです。

阿寒摩周国立公園での出会いから教えていたいたいこと。それは、未來の地域をつくる原動力が、ひとりひとりの思いから始まるということです。ひとりでは、すぐには何も始まらないように見えるかもしれません。けれど、その思いを伝えたり行動に移していくとすれば、きっと誰かと手を取り合える。そして、思ひが未来へと繋がっていく。そう確信できたのは、この土地でずっと続いてきたバトンを手渡すリレーのなかに、私たちも入れていただけだからだと感じています。

本誌を完成させることができたのは、取材させてくださった皆様のご尽力のプロジェクトに至るまでにご尽力くださいました全ての皆様が、ご自分に

A collage of three photographs showing mossy rocks and green plants. On the left, a QR code is overlaid on a close-up of green leaves and moss. The middle photograph shows a close-up of moss growing on a rock. The right photograph shows a wider view of mossy rocks in a forest setting.

発行日	2021年3月31日	第1刷発行
発行元	釧路自然環境事務所	阿寒摩周国立公園
	T E L 015-483-2335	〒088-3465
編集元	一般社団法人ドット道東	
	〒090-00058	
北海道北見市高栄西町8-4-7		
	https://www.cnv.go.jp/nature/natioinfo/	
編集主幹	中西拓郎	
編集・制作進行	佐野和哉（株式会社トーチ）	
アートディレクション	鈴木美里	
写真提供	國分知貴	
デザイン	鈴木美里	
執筆	岸竜之介 阿部光平（IN&OUT-ハコダテヒューリック）	
	清水達也（ファーレンドノート）	
	中山芳子（シリエトクノート）	
撮影	吉田貫太郎（Speech balloon nishiiburi） 佐野和哉（株式会社トーチ） 中西拓郎 名塚ちひろ 吉田貫太郎（Speech balloon nishiiburi）	

